

ISSN 1883-9924

甲南英文学

No. 26 泰 2011

甲南英文学会



編集委員

(五十音順、*印は編集委員長)

*青山義孝 中谷健太郎 福島彰利 横山三鶴

目次

| | | |
|--|---------------|----|
| 作家たちのパブリック・スクール・・・・・・・・・・・・・・・・ | 松村 昌家 | 1 |
| 「模倣」の時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 山口 徳一 | 21 |
| Toni Morrison の三部作——三部作の繋がりとしてみる ピラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータ——..... | 齋藤 幸恵 | 35 |
| 重名詞句移動の音韻論的分析 ——焦点(対照強勢)の観点から——..... | 西原 哲雄 | 53 |
| Finiteness and the Thematic Structure | Kazukuni Sado | 63 |

作家たちのパブリック・スクール

松村昌家

1. パブリック・スクールの特異性

パブリック・スクールは、よきにつけ悪しきにつけ、イングランド固有の教育機関として、長い歴史を誇る。その特徴は、観る側の立場や考え方によって毀誉褒貶さまざまだが、イギリスの国民性との関連で、パブリック・スクールのイメージを最も総括的に描き出しているのは、E. M. フォスター（1879-1970）である。フォスターのエッセイ集『アビンジャーの収穫』（1936）の冒頭に収められた「イギリス人気質に関する覚書き」から、その主要部分を抜粋しよう。

中流階級がイングランドの心臓部をなしているのと同様に、中流階級の心臓部をなすのが、パブリック・スクールの制度である。注意すべきは、この教育機関は、きわめて地域的なものだということだ。イギリス諸島全域に、これが行き渡っているのではない。パブリック・スクールを語るときには、アイルランドやスコットランドは、除外しなければならないのである。というのは、この教育制度は、アングロ＝サクソン人中流階級によって創設され、彼らが栄えた地域においてのみ発展してきたからである。これによって、その特徴のすべてが説明されつくされていると言ってよいだろう。

パブリック・スクールは、その寮生活、フットボールやクリケット等の運動競技、監督生と^{プレフェクト}ファギング、作法や団体精神の重視等によって、学校の数をはるかに凌ぐ重要な、一つのタイプを生み出したのである。

パブリック・スクールの課程を終えてからの進路は千差万別だが、たいていの者は、彼らのパブリック・スクール時代を、一生のうちで最も幸福な時代として懐しがらる。それはたとえ辛

いことがあっても、人生の複雑さとは無縁の時代であった。みんなが共に励み共に遊び、仮にも考えることがあったとするなら、共に考えた時代であった。そしてパブリック・スクールは世界の縮図であり、愛校心のない者は、愛国心のない者だと信じていた。このような過去の黄金時代を、彼らは愛惜の情をもって思い出すのである。

一読して羨望を禁じ得ないような内容だが、これを額面どおりにすんなりと受け入れるわけにはいかないだろう。彼の自伝小説『最も長い旅』（1907）第2部に描かれた「ソウストン校」を背景にすえて考えるならば、フォースターのパブリック・スクール観は、必ずしも積極的な明るいものではなかったことが、明らかになるからである。

特に注意しておきたいのは、「パブリック・スクールは世界の縮図である」という標語は、ソウストン校の校是となっていて、フォースターの分身であるリッキー・エリオットは、これに対して強迫観念的な厭悪の情を抱いていたということである。全体的に見ても、パブリック・スクールに関する評価は、決して単純に割り切れるものでないことに、留意しておきたいのである。

本論に入るに先立って、パブリック・スクールの制度そのものについて確認しておきたいのは、それが国立学校（state school）や公立学校（maintained school）と異なるということだ。国公立が学費無料であるのに対して、パブリック・スクールという名の私立学校では、高額な学費が必要である。

言い換えれば、パブリック・スクールは、国家主導の教育制度とは無関係の、古い伝統をもった、私立の中等教育機関である。そしてそもその起源は、グラマー・スクールにあった。

グラマー・スクールとは、聖職者養成を目的として、その名のとおりラテン語およびギリシア語の文法の習得を中心にすえた宗教的教育機関であった。その多くは大聖堂や修道院に付属していたが、ほかに慈善法に基づいて、貧困苦学生に同じ教育を授けるグラマー・スクールもあった。学費は両校とも無料。14世紀頃になると、人口約2,500万人のイングランド、ウェールズに、そういったグラマー・スクールが400校もあったということである。

それから時がたつにつれて、これら多くのグラマー・スクールから特に抜きん出た有名校が現われはじめ、次第に一般のグラマー・スクールとの間に一線が画されるようになった。その第1号が1382年創立のウィンチェスター校で、パブリック・スクールの歴史は、ここからはじまったのである。

それから約半世紀後の1440年にイートン校が創立され、第3番目にはウェストミンスター校(1560)、そしてラグビー校(1567)とハロウ校(1571)が後につづいた。以上の5校を“the inner five”という。そこへさらにチャーターハウス校(1662)とシュロウズベリー校、セント・ポールズ、マーチャント・テイラーズ校が加わって、九つの代表的なパブリック・スクール群が形成された。

シュロウズベリー校が設立されたのは1552年で、イートン校に次いで古かったが、荒廃がひどく一時は廃校の危機にさらされていたために、1882年に移転によって面目を一新するまでは、事実上パブリックの範疇からはずされていた。

これらパブリック・スクールは、少なくとも1867年の改革令が施行されるまでは、依然としてラテン語とギリシア語中心のカリキュラムを採用していたという点で、グラマー・スクールと大差はなかった。しかし高額な学費が必要であるという点と、多くの場合に予備校課程(preparatory school. 略して prep.)を終えてから選抜試験(The Common Entrance Examination)を受けなければならないという点で、パブリック・スクールには、エリート感覚をくすぐるような特殊性が具わっていた。

それが伝統的に貴族階級や地主階級の子弟が入る学校であり、しかも学費さえ払えるならイングランドのどこからでも子どもを送りこむことができるということで、19世紀イングランドの新興中流階級の父親たちにとっては、野心の向けどころとなった。

19世紀後半までは、パブリック・スクールといえば、男子校と決まっていた。息子が7歳か8歳になると、父親は彼を先にいった「プレプ」へ入れる。プレプは通学学校(デイ・スクール)もあれば寄宿学校(ボーディング・スクール)もある。家庭によっては、家庭教師による教育をもって、これに替える場合もある。

このコースを終えた少年は、大体11から13歳までのあいだにパブ

リック・スクールに入るが、修学年限は原則6年。最後の第6学年(sixth form)は、'lower sixth'と'upper sixth'の2年間にわたるシステムになっている。終了時の年齢は、通常18歳である。

設立の趣旨からいっても、パブリック・スクールは原則として全寮制をとらざるを得ないのだが、その制度に伴って、いわゆる「ファギング」制が発展したのも、パブリック・スクールの大きな特徴となっていた。

パブリック・スクールにおいて、上級生に対してある種の義務を果たす立場の下級生を“fag”という。従って辞書的には、下級生が上級生に対して“fag”としての役割を演じるのが、すなわち“fagging”ということになるのだが、これが基本的には制度として適用されていたことを理解するには、もう少し立ち入って考える必要がある。

ジョン・チャンドスの説によれば、ファギングは「少なくとも部分的には、教員の定員不足が原因で生じたもの」であった。つまりパブリック・スクールの人気が高まり、生徒が増えはじめると、既定の教員だけでは対応しきれなくなる。そこで学校当局が優秀な数名の上級生を選んで代理権を与えて、下級生の生活指導に当たらせ、下級生は彼らに服従する義務を負わせたのである。¹

少年たちの集団生活におけるこのような自治体制には、積極的に評価できる面があると同時に、非難すべき点が多々あったことは、想像に難くない。ウィンチェスター校出身で、のちにセント・ポール大聖堂の参事会員となったシドニー・スミス(1771-1845)が『エディンバラ・レビュー』(1810)に載せた「パブリック・スクール」には、ファギング制度に対するまっ向からの批判的姿勢がうかがえる。

パブリック・スクールでは(略)全生徒が代わるがわる暴君と奴隷の立場に立たされる。これらの学園社会において下級生に対して行使される上級生の権力は大変なもので——ほとんど統制が不可能である——往々にして残忍さや気まぐれが入りこむこともある。上級生に対する下級生の無条件の服従は、この社会における慣習法となっており、しかもその服従のありようは、あたかも奴隷の主人に対する服従や、水夫の船長に対する服従に似ていて、一人の少年がいくつか年上の先輩に対する一

般的な、自然な敬服の念とは次元が異なるのである。というわけで、この制度を一つの悪習だと考えざるを得ないのである。²

このあとシドニー・スミスとともに『エディンバラ・レビュー』の創設に関わったヘンリー・ピーター・ブルームが下院議員として、パブリック・スクールを政府の管轄に入れるべきだと過激な改革案を持ち出すようになる。しかし、パブリック・スクールの存立をゆるがすには至らなかった。それはもちろん「この自治体制における少年たちのプラグマティックな修業に対して、両親たちは時には信じ、時には躊躇しながらも、結局息子たちをそこで鍛えることを選択しつづけた」からである。³

言い換えるならば、パブリック・スクールは、ただ知能を養うだけの教育機関ではなくて、他人と接触することによって人間を造り、人間を鍛える場であるという、国民的な認識の上に成り立っていた、と言ってよいだろう。

少し古い話ではあるが、17世紀のホイッグ党大物政治家、ウィリアム・ラッセル卿のパブリック・スクールに関する所見に耳を傾けよう。親戚のタヴィストック卿から一人息子の教育について相談を受けたときに、応えて書いた手紙文の一部分である。

なるほど教育制度はよくない——子どもの勉強量が少なく、パブリック・スクールに対する反対意見もたくさんあります——この制度は、子どもを人間として成長させるのに適しています——周囲の仲間を知り——彼らを愛し——人生の難問と取り組んで闘う力をつけ、友だちを寄せつけ——公共事業に参加し——一人よがりの気分や気紛れを排除し、独自の気質とマナーを養い——世に出て人に愛され尊敬される人物に育てあげるのに適しているのです。(略)若いローマの貴族がどのようにして育成されたかを、考えてみてください。あのような傑出した人間が出来上がるのは、当然だったとお思いになることでしょう。⁴

これを古きよき時代の貴族主義的なパブリック・スクール・アイデアルだと思うのは間違いである。1832年の選挙改正法によって、新興

の中流階級が、社会的・政治的に発言権をもつようになってからも、パブリック・スクールの動向は変わらなかった。彼らはパブリック・スクールの伝統と、その国家的な役割に夢を托して、息子たちをこのミスティックな世界へ送りこむのに野心を燃やし、かつそれに誇りを感じたのである。

そして興味深いのは、ヴィクトリア朝の最盛期、というよりは大英帝国の最も旺盛な拡張期に、トマス・ヒューズ（1822-96）というラグビー校の“Old Boy”によって書かれた小説『トム・ブラウンの学校時代』（*Tom Brown's Schooldays*, 1857）が刊行されたことである。パブリック・スクール生活の全体像を映し出した作品として、また学園小説のアーキタイプとして、文学史上に不朽の名を残しているのである。

2. ラグビー校のトム・ブラウン

1832年の選挙法改正法による中流階級の擡頭と、平行して進行した鉄道の発達とによって、社会的変動の波が大きくうねりつつあった1834年4月2日、トマス・ヒューズは、11歳で親元を離れてラグビー校に入学した。トマス・アーノルド（1795-1842）が33歳で校長に就任（1828）して以来、リベラル・アーツに重点をおき、道徳的・精神的教育の面から改革を進めていた頃であった。

パークシャーの地主であったヒューズの父親が息子のためにラグビー校を選んだのも、教育者としてのアーノルドの名声にひかれたからであろう。

ラグビー校におけるヒューズは、小説の主人公トム・ブラウンと同じように、学業の面で出来のよい学生ではなかったが、クリケットとフットボールチームのキャプテンをつとめた。ヒューズは19歳でラグビー校を終えてオックスフォードのオリエル・コレッジへ進学、卒業後1845年に法曹界に入り、3年後に法廷弁護士に認定された。

その間に彼はフレデリック・デニスン・モーリスの影響を受けて、キリスト教社会主義運動に加わり、また下院議員として政界へも進出したが、彼の名を高からしめたのは、何といても『トム・ブラウンの学校生活』である。

8歳の息子がラグビー校に入学するのを記念して、8年間にわたる

自らのラグビー校生活体験に基づいて書かれた作品で、1857年から1892年までの間に、52版を重ねるほどの驚異的な人気を博した。

この小説の主人公トム・ブラウンは、バークシャーの郷士の息子として、牧歌的な幼年時代を過ごすのが、9歳でラグビー校に入って寮生活をはじめようになる。

10歳に満たない子どもたちを家庭から切り離して、寮生活をさせるのは、容易に考えられないことだが、レディ・ボナム・カーターが指摘するように、これは親たちにおけるきびしさから生じたことでは決してなかった。むしろ「親たちの甘やかしに対する自信のなさによる行為であったのである」。つまり「子どもは、親のもとにいるよりも、他人の家にいるほうが、行儀がよくなる。そして家を離れてこそ、自立心が養われ、自分の力で生活や人間関係に対処することができるようになるという考え」が、親たちの側にあったのである。

関連してもう一つ重要なのは、親たちの認識として、パブリック・スクールは、基本的に勉強のし方を教わるのではなくて、生き方を学ぶところだということだ。そこでは大人に向かっての一步を踏み出すことになる。「創立以来連綿たる歴史を誇る、わが国最初のパブリック・スクール——その草分けとなり、すべての後続校の模範となっているウィンチェスター校では、新入生はいくら若年であっても、入学当日から一人前の<人間>となるのである」。⁵

では、トム・ブラウンをラグビー校へ入れるときの父親のブラウン氏は、どのようなことを考えていたのか。語り手は言う。

郷士が何にもまして強調したかったのは、人間の価値判断の尺度となるものは、どの点から見てただ一つ、内面的に何がそなわっているか、彼という人間を囲む肉体の中に何が際立っているかということであって、衣服や地位、財産など、外的なものはいっさい関係がない、という信念であった。その信念はすべての政治的見解を健全な方法へ是正するのに役立つと、私は思う。もしそれが本心からのものであるならば、青色系〔保守派〕、赤色系〔急進派〕、あるいは緑色系〔アイルランド派〕のいかに拘わらず、すべての政治的見解が等しく無害なものとなるであろう」。(第1部、第3章)

そして息子を学校へ行かす目的は？というのと、「半分は本人が行きたがるから。ただ勇敢で、人の役に立つ、真実を語るイギリス人になり、一人前のジェントルマン、そしてキリスト教徒として成長してくれさえすれば、何もいうことはない」と、郷土は考えるのであった。バイブルを読むとか、ギリシア語の文法を憶えるとかは、すべて本人まかせである。

関連して特に注意しておきたいのは、『トム・ブラウンの学校時代』が、フットボールの対抗試合にはじまって、クリケットの対抗試合で終わっているということである。それぞれの試合において、トムが際立った働きをする。

前者は、スクール＝ハウス・マッチ——すなわち校長公舎寮生と全校生との間で闘われるフットボール試合で、トムがラグビー校に到着した当日に行われている。今日でいうラグビーとサッカーとがはっきり区別されていなかった頃のフットボール・ゲームのパターンが描かれていて、興味深い。

未分化時代には、パブリック・スクールにおけるフットボール試合には、それぞれの学校独自のルールがあった。一説によると、1823年にラグビー校で W. W. エリスという生徒がフットボールの試合中、興奮のあまり規則と慣習に反して、ボールを抱えて走ったことが契機になって、ラグビー・フットボールが創始された。

作品には「5, 60人からなる〔校長公舎寮生の〕白ズボンの少年たちが」「全校生の大軍と対戦することになっている」（第1部、第5章）とあるように、この当時にはチームの人員にも変化や不均等があった。大体50人から100人までの人数で構成されていた。

その後徐々に体制が整えられて、1875年までには通常のラグビーチームの人員は20人から15人に減らされ、1881年に正規のルールが適用されるようになった。⁶

トムが学校生活初日に経験するような大イベントにおいては、全校生が運動場に出なければならなかった。「数人の第6学年生がドアのところ立って全校生を一人残らず競技場へ繰り出す。(略)それ以外の第6学年生は運動場に出て行って、側門から脱け出す者がいないように、見張りをするのである」。(第1部、第5章)

このフットボール競技への参加をサボる者がいた場合はどうなるのか。『エディンバラ・レビュー』1858年1月号に載ったジェイムズ・フィッツジェイムズ・ステイーヴンによる『トム・ブラウンの学校時代』書評に、次のようなその問いに対する答えが出ている。

イートン校同様、季節の競技大会に生徒全員が出席することを直接に強制しているのではないにしても、少なくとも間接的には、同じ程度に容赦のない強制力が働いている。各少年がいずれか特定の場で競技に加わることを実際に義務づけているのではない。しかし、もし誰かが常習的に不参加を決めてかかった場合には、彼は皆からのけ者にされることを免れない。そして許し難い罪を犯した者としての強い嫌疑にさらされ——いつまでも腕力と軽蔑と仲間はずれの罰に値する人間——すなわち臆病者の烙印を押されるのである。

校長公舎寮生対全校生のフットボール試合は、50～60人対約120人というプレイヤーの不均衡もあって、校長寮生チームの旗色が次第に悪くなる。闘いが白熱化し、相手側のボールがゴール近くまで転がってきたときに劇的なことが起こった。「それまでに仕事の要領を飲みこんでいたトムが、いざ出番だ」とばかりに、ゴールキーパーと一丸となって飛びこんで、ボールを押さえた。味方の窮地を救うという大手柄を立てたのである。

先にあげた『エディンバラ・レビュー』の評によれば、「半分ギリシア風に、半分ゴシック風」に描かれたこの熱戦の様子は、パブリック・スクールにおけるフットボール・ゲームの風景描写の白眉ともいえよう。

しかし、だからといってラグビー・フットボールの導入や、その競技に伴う団体精神 (*esprit de corps*) の養成の功績までアーノルドの教育的功績に帰せられるべきではない。

そこでまず、上述のフットボール試合後に催された校長寮生のコンパの席で、スポーツ万能でこの日の対抗試合の花形でもあったペイター・ブルックが行った長いスピーチに、次のような言葉が含まれていることに注目しよう。

ぼくが何がなんでも、校長に追隨する男でないことは、諸君がよく知ってのとおりだ。もしも校長がフットボール、あるいはクリケット、水泳、あるいはボクシングを廃止するようになったら、ぼくはそれに立ち向かうのに、誰にもおくれをとらないつもりだ。だが、そんなことはあるまい——校長はそれらを奨励している。今日だって彼は半時間ものあいだ、試合を見ていたのだからね……（第1部、第6章）

これにはすでに、フットボールを導入したのはアーノルドではなかったということが、間接的に示されているのである。

事実ラグビー校校長としてのアーノルドの関心は、一に宗教と道徳原理、二にジェントルマンとしてのおこない、そして三に知性の涵養⁷であって、運動競技はさほど重視していなかった。にもかかわらず、アーノルドがラグビー校にラグビー競技を導入したかのように言われているのは、『トム・ブラウンの学校時代』の読者たちの思いこみによって広まった神話だったのである。

パブリック・スクールにおける教育の目標として、キリスト教の知識を最も重視していたアーノルドが、規律や風紀の面でその目的達成のために重んじたのは、いわゆる「監督生」(prefect; praepostor)の制度であった。要するに「ファギング」の延長であるが、アーノルドの場合は、「彼自身が、恐るべき威厳をもってそれに関わり、はるか手の届かない天上から、彼の選んだ手先の者たちを通じて、遠隔支配を行っていた」。そして彼は必要と思ったときには、鞭打ちの厳罰を与えることもあったし、理論上では体罰にも反対でなかった。⁸

これはアーノルドの教育理念からいえば、「筋肉のキリスト教」(muscular Christianity)精神、あるいは純潔な強健さの育成を旨としたものであったが、ジョン・チャンドスが言うように、彼の生存中も死後においても、教育修正主義者からの厳しい批判を免れなかった。そして遂には、伝記作家のリットン・ストレイチによって、トマス・アーノルド神話は破壊されるようになるのである。

しかし『トム・ブラウンの学校時代』はもともと「ある同窓生の作」として出版され、しかもアーノルド夫人に献げて書かれたものである。

少し極端な言い方をするならば、トマス・ヒューズのラグビー校へのノスタルジーと、校長アーノルドに対する偶像的憧憬の産物であったのである。そこにラグビー校生活の生のすがたや、アーノルドの教育理論の分析を求めるのは、無理だということになる。

そのどれよりもヒューズが重視し、力をこめたのは、ラグビー校における団体競技の描写である。

すでに見たようにトムは、入学当日に校長公舎寮生と全校生のフットボール対抗試合を経験して、咄嗟の判断で文字どおり怪我の功名に輝いた。

トムはその後、パブリック・スクール生活における通過儀礼ともいふべき「トッシング」の試練を受け、番長格のフラッシュマンの脅威にさらされながらも、順調に進級して、最終の第6学年では、監督生に任命される。と同時にラグビー校クリケット・チームのキャプテンとして活躍することになる。

そしていよいよ卒業を間近に控えて、イングランド第1の強豪を誇るマルリボン・クリケット・クラブと対戦して、8年にわたるラグビー校生活の掉尾を飾る。

第6学年へ進級するときに、トムは親友のジョージ・アーサーに向かって、パブリック・スクールの生活を、次のように総括する。

ぼくはクリケットやフットボール、その他の競技では、AIのトップに立ちたい。そして暴れん坊だろうが、紳士だろうが、どんな男にでもぼくは立ち向かって行くよ。学校を去る前に第6学年に進んで校長を喜ばせてあげたい。そして恥ずかしくない程度にオックスフォードに入れるだけのラテン語とギリシア語も身につけておきたい。(第2部、第6章)

ラテン語やギリシア語に対する気配りもなされてはいるが、トムにとってのラグビー校は、いわば「広大なプレイ・グラウンドであるかのような印象が強い」。それゆえにJ. F. スティーヴンは、トムのラグビー校は、校長アーノルドの思想や教育理念に支えられた学校ではなくて、人物の面でも情緒の面でも、チャールズ・キングズリーの小説世界に通ずるムードの濃厚な学校である。アーノルドでなくて、「キン

グズリーが最も有能な先生たるべき学校」ということで、スティーヴンは『トム・ブラウンの学校時代』にも、先に言った“muscular Christianity”（筋肉的キリスト教）というエピソードを適用しているのである。

「筋肉的キリスト教」とは、要するにキリスト教と、肉体的な健全さ、スポーツ愛好、自立心、愛校心、愛国心などを結合させた状態をいう。このようにして考えると、E. M. フォスターが描いたパブリック・スクール像からも筋肉的キリスト教が喚起されるが、なかでも「学校は世界の縮図」(school is the world in miniature)、あるいは、「愛校心のない者は、愛国心のない者」といった信条的標語が、取り入れられているのには、注意を向ける必要がある。

トブリッジ・パブリック・スクールにおける通学生としての苦い経験に基づいて書かれた「ソウストン」(『最も長い旅』第2部)には、校長のハーバート・ペンブロークが「学校は世界の縮図」をテーマにして演説をする場面が描かれている。

彼は皆に言った。(略) 各自がまずその期間中寮の名誉のためにがんばり、寮を通じて学校の名誉のためにがんばらねばならない。それから範囲を広げて彼はイングランドのこと、というよりは大英帝国のこと、そして大陸における帝国の敵のことに話を転じた。帝国の建設者たちの肖像が壁に掛けられていて、彼はそれらを指さした。彼は帝国の詩人たちを引いた。(略)

予習室とアングロ＝サクソン人の全世界覇権までのあいだには、ごく短い梯子が横たわっているだけなのだ。(第17章)

先にも述べたように、『最も長い旅』には、フォスターの自伝的要素が多く含まれているが、かなりのアイロニーの含みをもって綴られた「ソウストン」のこのシーンは、『トム・ブラウンの学校時代』とも無縁ではない。トマス・ヒューズは、アーノルドの教育的セオリよりも団体競技の重要性に力点をおくことによって、大英帝国建設の予備軍たるヴィクトリア朝イングランドの少年たちに、「学校は世界の縮図」の物語をつくりあげたのだから。

3. アントニー・トロロプのパブリック・スクール

E. M. フォースターの描いたパブリック・スクール観がイギリス国民性の所産であったとするならば、アントニー・トロロプ(1815-1882)が描いたパブリック・スクールは、どのように位置づけられるのだろうか。

トロロプは、トマス・ヒューズとほぼ同時代でありながら、彼とは対照的な、「醜いアヒルの子」的なパブリック・スクール生活を経験したという点でも、注目すべきヴィクトリア朝の作家である。

トロロプといえば、『養老院長』(1855)をはじめ、『バーチェスター寺院』(1857)、『ドクター・ソーン』(1858)、『バーセット最後の年代記』(1867)など、いわゆる「バーセットシャー・シリーズ」のほか、長短編を合わせて50編を超える量産の作家として知られる。

彼の『自叙伝』(1883)には、多作の秘訣や作者にとって作中人物との親密を保つことや、時代の変化とその影響を敏感にとらえることの必要性が、雄弁に語られているが、ここではその第1章「私の教育」に焦点をしぼる。この章は、父と子の問題や彼の初期教育の観点からだけでなく、ウィンチェスター校とハロウ校における通学生デー・ボーイに関する生きた記録として、興味津々たるものがある。

トロロプは、ウィンチェスター校からオックスフォードのニュー・コレッジの課程を終えて、イギリス大法官府の弁護士職に就いていたトマス・アントニー・トロロプの三男として、ロンドンに生まれた。

ここでまずウィンチェスター校とオックスフォードのニュー・コレッジが一直線につながっていたことに注意を向けておこう。共にウィンチェスターの司教であったウィカムのウィリアム(William of Wykeham, 1367-1404)によって創立された学校(ウィンチェスター校は1382年、ニュー・コレッジは1379年)である。創立者の名にちなんで、ウィンチェスター校の在學生、あるいは卒業生は、ウィカミスト(Wykehamist)と呼ばれる。そしてウィカミストは、ニュー・コレッジのフェロウになるのがお決まりの出世コースであった。

自らこの道を選んだ父トロロプは、息子たちのためにも早くからウィンチェスター校に入れることを決めこんでいたが、実際に彼らが入れたのは、ハロウ校であった。

トロロプの『自伝』によれば、ハロウ校の教員のなかには父トロロプの友人がいたことと、教区内の子弟は学費免除で就学できたことが、その主な理由としてあげられているが、それは要するに父親が、その当時窮乏生活に追いこまれていたことを意味する。彼は大法官府の弁護士職に失敗し、生計の手段としてハロウ・ウィールドでの農場経営に着手しようとしていた。彼のハロウ校の選択は、一にそういう事情によるものであったが、それはあまりにも軽率な、そしてトロロプにとっては、一生の心的外傷となるような選択であった。

ハロウ校が名誉ある“inner five”の一つであることはすでに言ったとおりだが、グラマー・スクールから変身を遂げた名門校として、特にイートン校に対する競争心が熾烈であった。大なり小なりの階級的区別は、パブリック・スクールの共通した風潮であったが、イートン校においては、給費生 (Collegers) と給費なしの市内寄宿生 (Oppidans) とは、全く異なった二つの社会に分けられていた。オピダンたちは、出入りの商売人はもとより、助教師 (もと給費生) たちからも社会的に上流階級と見なされていたのである。

ついでに言えば、ウィンチェスター校でも給費生と自費生 (Commoners) は、はっきり区別されたが、そこには社会的な意味での上下の意識はさほど強くなかったようだ。ラグビー校では寄宿生と通学生とのあいだの隔たりは、比較的にゆるやかであった。

そんななかで、ハロウ校における寄宿生と通学生とのあいだの溝はとりわけ広く、互いの階級的敵対心も相当に激烈であった。

そんなハロウ校に入ったときのトロロプの年齢はわずか7歳。もちろん通学生であった。

私がまだ3年生のときのことで、今でもよく憶えている。ある日、道で校長のバトラー博士に呼び止められた。まるでジュピターのように眉を曇らせ、雷のような恐ろしい声で彼はどなった。ハロウ校が、お前のような恥辱的な汚い生徒のために、名をよごされてたまるものか！ ああ、その瞬間私はなんと感じたことか！ しかし私はそのときの感情を直視することができなかった。私が汚かったのは、紛れもない事実だった。——でも校長は残酷だと、私は思った。

1823年から3年間ハロウ校に通ったあと、トロロブは1827年、12歳でウィンチェスター校に入り直した。父トロロブは、息子たちがウィカミストとして、ニュー・コレッジへ進んでくれる願望を捨てきれていなかったのである。

ウィンチェスター校における社会的・階級的差別は、ハロウ校ほどではなかったが、トロロブにとっては、そこにまた新たな苦悩が加わった。まず第一には、五つ年上の長兄トマス（トム）が上級にいて、新入生トロロブの監督生となり、容赦なく弟を痛めつけた。「あの学校時代の兄は、私にとって数ある敵のなかでも、最悪の敵であった。」と、彼は回想している。（『自伝』第1章）

トロロブは次に家庭的な面でも、辛い試練を担わされた。

彼がウィンチェスター校に入ってからまもなく、母親が生活の手段を切り開くために、次男と二人の娘をつれて、アメリカへ渡った。しばらくして父親と長男があとにつづいた。長男トムは、ウィンチェスター校を卒業したが、ニュー・コレッジのフェロウになる資格をとるのには失敗して、あとからオックスフォードの小さな寄宿制のオーバン・ホールに入ることになる。

結局無一文の状態でウィンチェスター校に残されたトロロブ少年の孤独と不安はどんなものであったのだろうか。『自伝』第1章の次の一節から、それをうかがうことにしよう。

学校の経費は滞ったままだった。生徒たちの必需品を供給していた校内の業者たちはこれ以上支払期限を延ばさないように、言い渡されていた。（略）私は校内ののけ者になってしまった。子どもは本来残酷である。でも彼らが互いのあいだで、誰かの酷い仕打ちに会っていつも苦しみつづけるといことがあるだろうか。私はときどき疑問に思う。しかし私は恐ろしくなるほど苦しんだ。これに立ち向かって堪えることができなかった。悲しみを打ち明ける友だちもいなかった。（略）もちろん私は服装も粗末でできたなかった。でもああ！私は自分の若い胸の痛みを、どれほどはつきり憶えていることか。そして切実に考えた。私はこれから先もずっと独りぼっちなのだろうか。あの校舎の

塔の上まで昇って行って、そこからすべてにけりをつけることはできないだろうか。

アメリカでの運だめしにも失敗して戻ってきた父トロロプは、何を思っ
てかトロロプを再びハロウ校へ引き戻した。それによって、トロロ
プのニュー・コレッジ・フェロウへの望みは完全に絶たれた。そして
再びハロウ校における屈辱のデー・ボーイ生活である。「私の学校時
代の屈辱感のある部分は、一生涯を通じて、私にまといついていた」
と、彼は書き記している。

このようにトロロプの『自伝』をベースにして見ると、彼のパブリ
ック・スクールの記憶はすべて忌々しいことだらけだが、これをもっ
て、彼のパブリック・スクール観は悲観的であったと結論を出すのは、
早計である。トロロプは、『自伝』第1章の「私の教育」におけるハ
ロウ校とウィンチェスター校での経験とは別に——とはいってももち
ろん無関係ではない——『フォート・ナイトリー・レビュー』第2巻
(1865)に、「パブリック・スクール」を書いている。1864年に行われ
たパブリック・スクールの歳入と運営に関する調査委員会報告とし
て書かれたものである。

ウィンチェスター校における生徒たちの寮生活、食事、洗面等から
教員や監督生と生徒らとの交渉の実情などが、詳細に語られているの
が興味深い。一例をあげるならば、「24年ほど前のウィンチェスター
では、朝食、昼食、夕食で支給される——あるいは許可されている——
飲物はビールだけで、お茶は贅沢品として絶対禁止されていたとい
うのだ。

この学校へ入る目的は、専らラテン語とギリシア語を学ぶことだけ。
しかし「私は在学中にラテン語についてもギリシア語についても、ま
たほかのどんな学科についても、先生のほうから教えてもらうような
ことは、一度もなかった」。どうするのかというと、一日に2、3回一
人ずつ先生の前に行って、割り当てられている文章を暗誦したり、訳
をつけたりして、それによって成績の優劣が決められていたのである。

若い生徒たちに勉強を教える実務を担っていたのが監督生、あるい
は、助教^{チューター}だ。その教え方というのはこうだ。一定の学年に彼らの担
当する生徒がしかるべき数のラテン語の韻文を正しく作れるように

導く。そしてその年のしかるべき時期に、記憶力の及ぶ限りラテン語とギリシア語の詩をたくさん暗記するようにすること。それでウィンチェスター校の生徒たちは、『イニーアド』、ホラティウスの『詩集』、『イーリアス』、『オデュッセイア』などを暗記させられるのである。

1861年7月にパブリック・スクールに関する調査委員会が活動をはじめてからは、教育制度やカリキュラムに関して徐々に改革の兆しが現れはじめたが、その実現に至る道は、決して平坦ではなかった。たとえば近代史や近代語を取り入れたカリキュラムを編成しようとした場合に、担当教員の不足という壁が立ちはだかっていたからである。トロロプが1861年の委員会報告に基づいて述べているところによると、イートン校では、古典学、数学、近代語を含む全教科を教える場合、生徒20名に対して教員が1人、ハロウとシュロウズベリー校では22名に対して1人、ウィンチェスター校では20名に対して1人といった具合だ。フランス語、ドイツ語、イタリア語等の外国語に関しては、教員1人で806名の生徒を担当しなければならない状況であった。ファギングや監督生制度が必然的に導入されたゆえんであり、また生徒たちが先生から直接に教えてもらえず、教師の前に出て暗記するだけの授業にならざるを得なかった原因でもあったのである。

1864年の調査委員会報告として書かれたトロロプの「パブリック・スクール」は、もちろんパブリック・スクール改革に向かったの提唱なり示唆を含んでいたには違いない。しかし、改革に対する彼の態度は、きわめて曖昧である。彼の中のパブリック・スクールの記憶がトラウマティックなものであったにもかかわらず、彼の改革意識は必ずしも前向きではなかった。

かつては実に馬鹿らしく思われた校内の生活風景が改変されているということを知ることにつけて、「私の内なる保守的側面がかき乱されるような気がして、寮の栄光は消えた、とウィンチェスター校の同窓生につぶやきたい気持ちにかられる」と、彼は言う。

それから10年後に書きはじめられた『自伝』では、ハロウ校あるいはウィンチェスター校の同窓生との対話を拒否する姿勢を露骨に示しているのが、不思議に思えるくらいだ。しかし「何ひとつ嘘を交えずに」語られた個人的な生い立ちの記と、社会人としての立場で書かれた回想記とのあいだに、たとえ表現上のずれがあったとしても、

それを矛盾だと考える必要はない。もう少し彼の保守的側面からの話を耳を傾けよう。

われわれの選りすぐった子どもたちを行かせる学校で、真の教育が行われるべきなのは、言うまでもない。しかし、そのことを感じ、かつ認める一方で、私が今まで述べてきたような愚かしい映像は、次第に薄れて、これらの学校から蒙ったあらゆる恩恵が、ただそれだけとは言わないまでも、重きをなして記憶に浮かんでくるのである。その上そこでは友情が結ばれる。そこでわれわれは、正直で真実で勇敢であるべきことを学んだ。そこでわれわれは、軟弱な贅沢を排斥し、苦難や粗暴な訓練を好むように鍛えられた。そこでわれわれは、一人前の人間になった。人に恐れられるか愛されるかはともあれ、仮にわれわれが無知であったとしても、常に尊敬されるような人間になった。

パブリック・スクールの賜物としてイギリス人と一体となっている^{ブリリティ}気高かさを、誰が定義できようか。またその源がどこにあって、その実体がどういうものなのか、誰が説明できようか。しかし、その存在については、すでに完全に認識が深まっていて、それが、今日苦情の種になっている、教室での授業の欠如を埋め合わせて余りあることを感じ得ない人は、ほとんどいないのである。

そもそもパブリック・スクールの究極の目標は何であったのか。この問いに対してトロロブは、「基本財産が安定している立派なパブリック・スクールとは、知的な意味における教育機関というよりは、社会的な機関として考えられるべきだ」という答えを用意していた。

そして彼は、雑草を取り除くにしても、それといっしょに穀物まで取り除いてしまわないように、十分に注意しなければならないという比喩をもって、パブリック・スクール改革に警戒を呼びかけているのである。

(本稿は、2010年7月3日に開かれた第26回甲南英文学会総会で行った講演原稿を基に加筆したものである。)

注

- 1 John Chandos, *Boys Together: English Public Schools 1800-1860*, Oxford University Press, 1985, pp. 25-26.
- 2 *The Works of the Rev. Sydney Smith*, Vol. 1, London: Longmans, 1845, p.223.
- 3 Chandos, p. 26.
- 4 *ibid.*
- 5 Lady Violet Bonham Carter, "Childhood and Education," Ernest Barker ed. *The Character of England*, Oxford at Clarendon Press, 1947, p. 230.
- 6 Andrew Sanders ed. Thomas Hughes, *Tom Brown's Schooldays*, Oxford University Press. 1991, p. 394 n.
- 7 Lytton Strachey, *Eminent Victorians* (the Illustrated Edition), Bloomsbury, 1988, p. 116.
- 8 *ibid.*



「模倣」の時代

「模倣」の時代

山口 徳一

SYNOPSIS

During from the late seventeenth to the early eighteenth century known as the Augustan Age, when Alexander Pope (1688-1744) and other great authors enjoyed flourishing careers, the practice of literary imitation was a more central aspect than in any other period. One of the reasons is because imitation had been endorsed by John Dryden (1631-1700), the great poet who established the basis of that literary golden age.

The other reason is that by the series of new scientific discoveries made by Galileo Galilei (1564-1642), Isaac Newton (1642-1727), people became so concerned about nature that they were ready to accept the ancients whose attitude toward nature was to imitate it in their writing which is similar to that of the modern scientists. As they made the new scientific discoveries of nature, so authors tried to rediscover the classical works.

Moreover, the poor authorship of this period seems to have something to do with a vogue of imitation by those hack writers in Grab Street who were paid to write low quality works at the request of booksellers.

Examining the reasons why imitation prevailed, this treatise will discuss how some contemporary writers could retain originality in literature.

はじめに

一般に新古典主義と呼ばれる17世紀後半から18世紀初頭にかけての時代は、文学における模倣が大いに論議され、そして広く受け入れられた時代である。それは恐らく当時の文学界における第一人者である John Dryden (1631-1700) が作家のインスピレーションの源泉として、古典を拠り所にするのを推奨したことが大きな要因であると推察できるが、一方で17世紀に相次いだ Galileo Galilei (1564-1642) や Isaac Newton (1642-1727) 等による自然科学上の発見が、自然に目を向けることの重要性を人々に実感させたことも大いに影響している。

つまり自然に目を向ける科学者の態度は、自然を模倣することによって詩作を試みた古典人の態度そのものであり、自然の再発見は古典の再発見であったのである。加えてこの時代の著述業が作家の生計を養うには決して十分なものではなかったことも、少なからず文学における模倣が蔓延する要因であったと考えられる。しかし、単なる模倣に終始した作品が数多く出版されたそのような時代にあっても、今日まで読み継がれる名作は事実存在する。そしてそれらの作品に共通するのは、まさに Dryden が“the Soul of Poetry”と呼ぶ“probability”を創出しているという点である。

「模倣」とは

無論古典への回帰は Dryden 独自の発想という訳ではない。彼は Rene Rapin (1621-1687)、Andre Dacier (1651-1722)、Nicolas Boileau (1636-1711) 等当代のフランスの批評家たちを通じて古典への傾倒を強くするのだが、彼等の著述中に Dryden が見出したものこそ、インスピレーションを求めるには偉大な作家を模倣すべしという原理の存在であった。William Shakespeare (1564-1616) の悲劇 *Troilus and Cressida* (1602?) を翻案した *Troilus and Cressida, or, Truth Found Too Late* (1679) の序文で Dryden が説いた「模倣」の概念は、上述のフランスの批評家たちの考察が発端である。その序文によれば、「模倣」とは作品の形式的な特徴を猿真似するとか、出来事、フレーズ、言葉遣いを無差別に借用するとかではなく、以前の傑作を生み出したあの不可欠な力を再び捉えることを求める、いわば精神の過程であると定義づけている (Dryden 228)。彼はとりわけアリストテレス (B.C. 384-322) による “ideal imitation” に着目し、自然をあるがままに「模倣」することこそ詩作のプロセスであるとし、自然現象は変化と衰退に従うけれども、自然は常に自らのこうした欠点を矯正しようとその創造に努力しているように、芸術もまたそのように理想的な形で物事を提示しようとする自然を真似るべきである、と Dryden は考えた (Atkins 112)。その「模倣」の効果は、従ってインスピレーションや啓蒙の効果と同一であり、以前のモデルからの創造的刺激ということになる。他から借用しない詩人など存在しないと考える彼にとって、古典を真似ることはそのインスピレーションを受けることであり、自

然の倉庫から与えられたものを素材とする古典を模倣することは、即ち自然を模倣することや自然からインスピレーションを得ることと同一であり、また古典の巨匠たちの精神を把握することで、創造の原動力を共有することにもなるのである。

「Spenser は一度ならず Chaucer の魂が自らの体内に溶け込んでいると仄めかしたし、Milton は Spenser が私のオリジナルであると認めた」と言い放つ Dryden は (Atkins 131-2)、英国劇の批評家として夙に知られた Gerard Langbaine (1656-92) 以上に、他からの文学的影響や借用を重要と考え、Langbaine が作家による剽窃行為と考えた事柄さえも擁護し、他からの影響や借用は力強くかつ繊細な性質のものであるとしたのである (Atkins 132)。

「模倣」による啓蒙

かくして古典に目を向けることは自然に目を向けることと同一視されるわけだが、そこからさらに自然 (nature) と人間の自然 (human nature) も同一視されることになる。つまり自然科学上の発見で見出された自然の規則正しい法則は、人間の自然である人の性質にも宿っていると考えられた。Alexander Pope (1688-1744) が “human nature” を “wit” と同一的に捕らえ、人間性における “regularity” を “good sense” と見なしていたことがまさにその裏づけであるが、¹ このようないわば人間を生まれながらに善と見なし、“good sense” を元来備えているとする考えもまた、古典から受け継いだものである。というのも、Joseph Addison (1672-1719) や John Dennis (1657-1734) が崇拝した古代ギリシャの修辞学者 Cassius Longinos (217-273) がその『崇高論』において、² 自然の女神が崇高なものや神聖なものを思考する性質を我々の内に注ぎ込んだと断定しているのだから。³

さらに Longinos による、「模倣」によって巨匠の崇高な概念を得るべしという教えは、まさに、道徳を教えることが詩人のビジネスであるという Dryden の叙事詩に関する主張の中にも反映されている。しかし、彼の場合は古典で語られている以上に道徳的規範を教えることを重要とみなす。というのもアリストテレスが、主人公が一貫性を持って描かれていれば必ずしも完璧な英雄である必要は無いとしているのに対し、Dryden の叙事詩論では、道徳的規範を教えることで英

雄的美徳を示すことを目的とするが故に、英雄は完璧でなければならないと規定するのである。つまり完璧であれば主人公全体が「模倣」され得ることになり、それこそが Dryden にとっての理想というわけである (Dryden 236, Atkins 118)。

Dryden がそれ程までに道徳を啓蒙することの重要性を強調した背景には彼の生きた王政復古期という時代を考慮する必要がある。Oliver Cromwell (1599-1658) 率いる道徳的に厳格なピューリタン政治が崩壊し、旧来の王政に戻ったイングランドは、それまでの厳格なピューリタン政治に対する反動もあり、数多の愛妾を抱える Charles II (1630-85) と性的に墮落した宮廷生活に象徴されるように、不道徳の蔓延が嘆かれた時代である。また同時代に Jonathan Swift (1667-1745) が “English taste” の腐敗を嘆いたのも、その時代の墮落的風潮と無関係ではない。彼はその腐敗の原因が言葉と文体の乱れのせいであるとした。

Swift は、1642 年以降情熱的な隠語と無法の王政復古期のために際立って “English taste” が墮落していると見なしたが、その改善策として彼が示すのは、宮中であれ街中であれ、あらゆる気取りや、不自然な修飾語句、また感情的訴えを侮蔑し、率直な良識を擁護するというものであった。さらに文体の真の定義を、適切な場での適切な言葉の使用と定め、発話の単純明快こそが最上の飾りとし、そのための文体の手本として、*The Pilgrim's Progress* (1678) や English Bible、また Prayer Book 等を Swift は勧めるのだが (Atkins 174-5)、このように彼もまた Dryden 同様、文学によって大衆を啓蒙することの必要性を認識しているのは明白である。

Swift に見られるそのような姿勢は Addison や Dennis、そして Pope といった当時の文壇を代表する作家たちにも共通するものである。古典の崇高な精神を「模倣」することによって創作された作品を提供し、その精神をさらに人々に「模倣」させることこそ詩人の務めであるとした Dryden。文壇の大御所のこのような態度が、文学界における「模倣」が大いに擁護され、実行される要因であったと考えられるのである。

読者層の増加

文学史上の黄金期とも呼ばれる Anne 女王 (1665-1714) の統治時代は多くの文芸人が活躍した時代であるが、それほどに多くの作家が活躍し得たのは、逆に言えば、彼等の作品を読む読者の増加という要因があったからである。識字率がそれ程高くは無い時代の大衆と文芸の関わりと言えば観劇が主であった。1663年創設のロンドンの Drury Lane 劇場や Covent Garden 劇場等の王立劇場で上演される演劇が、人々に文芸作品と接する機会を提供する主要な場であった。そこへ登場したのが *The Tatler* (1709-1711) と *The Spectator* (1711-12) に代表される定期雑誌である。無論それ以前にも定期刊行物は存在していたが、それらは主にゴシップやスキャンダルを主体とする、低俗な内容のものが殆どであった。そんな中、政治やスキャンダル、特定の人物への中傷や皮肉、聖職や結婚への風刺等を伴わない、高尚な刺激を人々に提供することを謳い文句に 1709年に *The Tatler* が、続いて 1711年に *The Spectator* が刊行され、それまでとは違う格調の高い活字によって新たな読者層の開拓に貢献したのである。

読者層開拓の火付け役となった両誌であったが、その後立て続けに起こったジャコバイト蜂起 (1715)、Bangorian 議論 (1716-21)、南海泡沫事件 (1720) 等のイングランド全体を騒擾させる社会的事件の影響は読者層の増加にも影を落とした。しかしその後 1731年に Edward Cave (1691-1754) が創刊した、既存の雑多なゴシップや、スキャンダラスなニュース・著作物の中でも取りわけ出来の良いものを集めて集約した *The Gentleman's Magazine* が、人々が意見を交わす社交場としてのクラブやコーヒーハウスの流行とも相俟って大ヒットし、*The Tatler* と *The Spectator* 以来の読者層の増加につながるのである。同誌は 1739年に 1万部、数年後には 1万 5000部を売り上げ大成功を収めるに至った (Collins 240)。

一方で時の宰相 Robert Walpole (1676-1745) による *The Daily Gazetteer* (1740) に代表される、党の宣伝目的の political magazine も、政党の時代と呼ばれる 18世紀初頭から相次いで発行されたことや、また富を得た真面目な中産階級が文化に興味を持つようになったことも、この時期に読者層が急速に拡大したことの要因であることは疑いない。結果、このような読者層の増加によって、書物が広く世間に

出回ることが可能となり、多くの作家を受け入れるだけの環境が整ったことが、文芸黄金期を支えた一因であると言えるのである。しかしそのような読者層の拡大は、作家の在り方そのものにも大きな影響を及ぼすことになる。

著作による生計

エリザベス朝の劇作家たちや王政復古期の Dryden がそうであったように、元来、作家が著作によって生計を立ててゆく方法はパトロンを得ることであった。しかしながら 17 世紀終わり頃から 18 世紀初頭にかけてパトロンのあり方そのものに変化が訪れる。本来の patronage は social patronage と呼ばれるもので、文芸愛好家の王侯貴族たちが有望な作家を金銭的に扶助するものである。彼等は資金的な援助はするものの、作品に付与される自らへの献辞以外に何がしかの見返りを求めることは稀であった。お抱えの詩人によって自らへの賛辞溢れる献辞を得ることはいわばステータスであった。ところが名誉革命により James II (1633-1701) が追放され、Tory と Whig の二大政党による政治が始まって以降、政治家たちが、筆の立つ文学者への後援または年金を与えることによって、自らの政党に役立てようとする political patronage に変わっていったのである。John Somers (1651-1716) や Halifax 伯こと Charles Montagu (1661-1715) といった Whig のリーダーである貴族が Addison や Richard Steele (1672-1729) 等を議会議員にし、また Tory の中心メンバーである Oxford 伯 Robert Harley (1661-1724) や Bolingbroke 子爵 Henry St. John (1678-1751) が Pope や Swift を擁護していたという例に見られるように、前時代には見られなかった政治のための文学者の利用が political patronage である。

この political patronage は、先に述べたように、賄賂によって政治をコントロールした Walpole の時代には多くの文人に年金または出版費用のための寄付金という名目で金銭を与え、自らの政党に利するパンフレットを書かせることになり、一時政界における流行となった。無論作家にとっては、こうした援助は生計の糧を得る絶好の機会であり、また大抵の作家が政治思想的には無頓着であったため、どちらの党からの patronage でも喜んで受け入れるという態度であったこともこの流行を助長したようである。

しかしながら 1742 年の Walpole 失脚、また 45 年の二度目のジャコバイトの蜂起等による政情不安の中で、social patronage に取って代わることとなった political patronage もまた次第に衰退してゆく。そこには 1720 年代から次第に作家数が増加し、一部の貴族階級・国会議員だけではとても彼等のパトロンとはなりえないという事情もあつたが、いずれの patronage にしろパトロンによって作家が生計を立てるという手段は前時代的なものであり、学問の普及とともに識字率が向上し、また商業経済の近代化という過程の中では、当然廃れゆく慣習であり、いわば繋ぎの役割でしかなかったわけである。代わって台頭してくるのが出版を生業とする書籍販売業者たちである。

書籍販売業者の台頭

それまでの patronage による作家の支援という形態から、作品を売ることによって作家の生計を成り立たせるいわばビジネスという形態を取るために何より欠かせないのが、作品を購買して読む読者層の拡大である。先に述べたような事情で、18 世紀初頭からイングランドの読者層は次第に増加して行き、書籍販売業をビジネスたらしめるだけの状況は整いつつあつた。しかしながら着実に増加しつつも、*The Spectator* や *The Tatler* の時代における読者層はいまだ成長段階にあり、ロンドンと他の地域を繋ぐ交通網の未発達や、いまだ清教徒的気風の残るロンドン市民と、陽気な王様 (Merry Monarch) による愉快的生活の名残が抜け切れない宮廷社会との乖離のため、読者層は、地理的にはロンドン、そしてその中でもとりわけロンドン社交界というようになりかなり限られたものであつた。そのため出版業はおよそ 25 のロンドンの出版社による独占状態であり、それは 18 世紀半ばまで続くことになる (Collins 232)。彼等は「同業者」(the trade) と呼ばれ、他の出版業者に対して、そして作家に対しても優位に振舞つた。

当時の作家と書籍販売業者間での契約は作家が新たに著した作品の著作権を即座に書籍販売業者に売り渡すというものであり、売り上げ配分によって作家が書籍販売業者と著作権契約を交わすというやり方は 18 世紀後半になるまで見られない。当時著作権の有効年数は 28 年であつたが、大抵の書籍販売業者たちは新たに出版される書物が数年しか売れない見込みで買い取ってしまうのが通例であつた。と

いうのも著作権の価値付けは困難であり、書物は出版後数年しか売れないと仮定するのが最も安全であったからである。しかしそれは作家にとってもメリットはあった。というのもいまだ発展段階にある読者層に自らの著作を売り込む手段を作家は持ち合わせておらず、また当時の出版業にとっての最大の問題である著作権侵害に対する防止策にいたっては、作家個人では全く対処の仕様がなかったのだから。

海賊版と著作権

1710年に“The Act for the Encouragement of Learning”が議会の承認を得て施行されたのは、上述のロンドンの「同業者」が、正式な著作権が法的に承認されることで海賊行為から自らを守るべく議会に訴えたことによる。この法令はそれ以前に発効されたいくつかの“Licensing Act”が改正されたものであるが、この改正によって1枚につき1ペニーの罰金を海賊行為に対して課すことが認められた。しかし実際のくらの印刷物が無断で出版されているのかを把握するのは不可能であり、結果いくらの罰金が課せるかは特定出来ない状況であった。にもかかわらずこの法令が書籍販売業者たちにとって重要であったのは、罰金を得ることではなく、書物に対する著作権が法的に認められたことにより、海賊業者を法廷（Court of Equality）に申し立て、彼等に対し差し止め命令を出すことが認められたからである。つまり差し止めることにより海賊版の流通量を抑えようとしたのである。

しかしこの改正法案でもまだ十分ではなかった。というのもこの法令では著作権は英国（グレートブリテン王国）に限られており、アイルランドやフランスでは保護されていなかったのである。しかもアイルランドに至ってはアイルランド議会自体がイングランド作家からの盗用を認めてさえた。従って海賊版の輸入にはこの法令も効力はなく、違法コピーに対して多大な罰金を課すことを認める1738年の新たな法令を求めて「同業者」は更に議会に訴えることになるのである。

このような法による著作権の取り締まりを訴えるには作家個人の力ではどうにもならず、また出版だけでなく書物の販売も請け負っているのが彼等「同業者」であるが故に、彼等に印象を悪くすると、結託した書籍販売業者たちが挙って特定の作家の作品の販売を取りや

めてしまうこともあり、ロンドンでの著作の販売は立ち行かなくなる。作家が書籍販売業者にとって有利な条件で著作権を即座に売り渡していたのはこのような理由からであった。

また作家の著作権を単独の書籍販売業者が買い取ることは稀で、通常は彼等が数件集まり何軒かでその著作権を共有し、共同出版していた。というのも共同出版すれば著作権を共有する各店に新たな著作を陳列することで書物の販売を促進させることが可能であり、またどうにも売れない書物を出版してしまった場合に生じるリスクに対しても共同で対処できるというメリットがあったからである。逆に言えば、リスクのありそうな書物も共同することで出版を可能にしていたという意味では、作家、引いては文学界にとってのメリットでもあった。しかしながら無論メリットばかりではない。この 25 余りの書籍販売業者による書物の出版・販売の独占は、作家に対する書籍販売業者の絶対優位という構図を生み出さずにはおかないのである。

Swift の計算によれば、18 世紀初頭のロンドンにおける作家は数千人に上ったというが (Collins 13)、この数字を見ても、「同業者」を構成する出版社が約 25 社であったのに比較して、圧倒的に作家過剰の状態であったことが窺える。先に述べたように *patronage* の習慣が次第に衰退してゆく状況の中、文筆を生業として生計を立ててゆくには、すでに名声を確立した一部の作家を除き、書籍販売業者に頼る以外は殆ど望みがなかったことに加え、数の上でも彼等が圧倒的に有利であったのである。このため、法令によって著作の著作権が正式に認められたとはいえ、その著作権を盾に自らに有利な交渉をしようとする作家側の目論みは、恐らく「同業者」に一蹴されたであろうことは明白である。ただ Pope だけは例外であった。

書籍販売業者による支配

1724 年にホメロスの翻訳により 5000 ポンドを、そして続く 25 年には Shakespeare 全集の刊行により、かの Kit-Cat Club の創設者としても知られる書籍出版販売業者の Jacob Tonson (1655-1736) から 217 ポンドの報酬を得ることで、Pope は生活の安定を生涯保障される身分となった。文筆家が生きてゆくには社交界か政界のパトロンに依存するか、あるいは「同業者」と不利な契約を交わす以外に手段のなか

った 20 年代にあって、彼はいずれにも頼ることなく、作家としての尊厳を目指し、文学のための文学を築くというスタンスを貫き通した。また他者への明け透けな中傷や誹謗に満ちた *The Dunciad* (1728) を公然と出版するという大胆さも持ち合わせていたが、これらはある意味金銭的に自立していたことから可能であったのであろう。しかしながら彼は例外的な存在であり、いわば孤高の人であった。18 世紀を通じ Pope のようなスタンスを貫けた作家と言えばかの Samuel Johnson (1709-84) 以外には存在しないのである (Collins 126-7)。

従って殆どの作家は三文文士たちが多く住んだと言われる Grab Street の作家たちのように、金銭的に余裕のないものたちであった。William Hogarth (1697-1764) による、*Dunciad* に着想を得たとされる絵画、*The Distrest Poet* (1740) には、屋根裏に住み、その日暮しの生活を強いられる当時の文士たちの状況がつぶさに描かれている。事実 Grab Street の作家たちは、一度だけ読んで後は省みられないような雑誌の短編記事などを書かせるのに都合が良かったので、「同業者」とそしてそれ以外の中小の出版業者たちによって、餓死しない程度の屋根裏生活で養われていることも頻繁であった。

彼等の雇い主が書籍販売業者である限りは、当然大衆に売れるものを書かねばならない。しかも圧倒的作家過剰の状況の中では、書籍販売業者主導の売れる作品を是が非でも書かねばならなかった。市場調査の結果、書籍販売業者たちが知りえた大衆の好むものとは、悪漢生活や、詐欺、または官能的なレイプ物という類いである (Collins 217)。しかしながら自らの力で作品を構成し、大衆に新たな発想を提供できるだけの才能のある作家はそれ程多くはいなかった。というのも、当時は作家という仕事は最後の手段である場合が多く、他の仕事に失敗して仕方なく作家になったという者たちも多くいたのである。

このような状況にあって、しかも書籍販売業者たちから使い捨ての多くの文章を書くことを強いられていた Grab Street の作家たちが取りえた方法は、未だ訳されていないフランス語の作品からの翻訳や、古い書物の新たなタイトルによる書き直しまたは要約であった。出版の際に著名な作家の名前を一文字か二文字書き換えたりすることまでであったという (Collins 26)。こうしたことが恒常的に行なわれ殆ど常態化していたのが当時の出版業であったのだから、出版される著作

の多くが、他からの借用あるいは模倣であったであろうということは想像に難くない。利益最優先の結託した書籍販売業者たちと職業的地位の低さのために数多いた能力に乏しい三文文士たち。そして徐々にではあるが、着実に拡大してゆく読者層のニーズ。18世紀前半の出版業界において模倣が横行したのは当然の成り行きであった。

「模倣」とオリジナリティ

しかしながらその一方で、Swift による *Gulliver's Travels* (1726)、John Gay (1685-1732) の *The Beggar's Opera* (1728)、James Thomson (1700-48) による *The Tragedy of Sophonisba* (1729)、そして *Dunciad* といった今日の文学史を飾る名作もまた、1720年代には大いに出回り人々に読まれていたのも事実である (Collins 237)。文学史上新古典主義に属するこれらの作品もまた、例えば古代ギリシャの風刺家アリストパネス (B.C. 446-385) の手法を模して構成された *Gulliver* がそうであるように、古典あるいは他の作品からの借用的な要素を伴うものである。けれども三文文士たちによるいわば節操のない模倣作品が一読して捨て去られるのとは異なり、これらの作品は今日まで読み継がれてきている。その違いはどこにあるのか。

当代の喜劇作家 George Farquhar (1677-1707) は、イングランド人は説明不可能なまでに様々な気質がより集まる人々だから、劇作はフランス人やスペイン人の観客でなく、イングランド人の観客に即したドラマを作るべきであると述べ、また Shakespeare、John Fletcher (1579-1625)、Ben Jonson (1572-1637) 等は時と場所の一致や筋運びの法則に従わなかったが、一貫性の無い不自然な筋や説得力の無い人物では観客は満足しないはずであるから、彼等は単に無法というわけではないとも主張した (Atkins 177-8, Dryden 234)。彼のこうした発言の背景には、当時の劇作においては古典のルールに従うことが前提であったという事情がある。つまりアリストテレスやまた *Poetics* (1651) で古典の韻文作品を分析し、一貫した文学史と文学論を確立しようとした Julius Caesar Scaliger (1484-1558) に倣い、「時と場所の一致」を遵守することが劇作における基本とされていたのである。

このように新古典主義の著作法が劇作にも取り入れられていたのは、詩や小説の分野で、Pope に代表される多くの当代の一流の文人

たちが古典を模した作品を創作したのと同様である。しかしながら Grab Street の作家たちとは異なり、彼等は単なる古典の模倣に墮してしまわなかった。そしてその理由も、Farquhar が Shakespeare や Ben Jonson に指摘したのと同様の理由である。つまり当代の優れた作家たちもまた、古典を模しながらも、Shakespeare や Jonson 同様、一貫性の無い不自然な筋や説得力の無い人物を描いてしまうほど古典に縛られていなかったと言える。いみじくも Pope が *An Essay on Criticism* (1711) において、読者の心に訴える限りは、規則からの逸脱を容認すべきであると述べているように (Pope 149)。

1740 年代に登場した巡回図書によって大衆がより安く書物を読むことが可能となり、結果的に書籍の購買も増え、読者層の拡大に貢献した。また地方での読者層の拡大に障害となっていたロンドンとの交通網も次第に改善され、さらには教育波及効果もあり、50 年頃からはブルーストッキングに代表されるように、女性の読者や女流作家が登場するほどに読者層は飛躍的に拡大した。その結果、読者はより教化され、文学批評はより活発化し、そして作家はますます規則よりも読者の満足を優先させねばならなくなった。古典を「模倣」することによって、古典の精神を吹き込む作品を提供することを最重要視し、「詩人の仕事は大衆を啓蒙すること」と言った Dryden は今や前世紀の人となり、代わって拡大した読者層が作家を導く時代が変わっていた。

しかしながら、観客の反応が即座に伝わり、彼等の満足度が興行収入に直結する劇作の世界では、読者層が拡大するずっと以前から、観客の反応こそが劇作に対する試金石であったのである。⁴ Shakespeare や Ben Jonson は読者ならぬ観客の反応によって夙に普遍なるものを理解していた。その結果、規則に則りながらも、普遍を提示するためには規則を逸脱することを恐れなかったのである。同様に、古典を模しながらも普遍を提示している作品であれば、それは単にオリジナルを真似ているのではなく、新たなものを創造していると言えるのであり、そのような作品のみが今日まで読み継がれている。そして読者を引きつけるための普遍とは、作品に “probability” を与えることである。Dryden はそれを “the Soul of Poetry” と呼ぶ。⁵

Notes

- 1 *An Essay on Criticism, An Essay on Man*
- 2 Longinusの著作ではないとする説もある。制作年不詳。
- 3 Tsuyoshi, Mori. "Longinus's *On the Sublime* and Addison's Imagination," *Bulletin of Aichi Institute of Technology. Part A* 14, 15-22, 1979-03-31
- 4 もっとも Dryden は一般の観客と "reasonable Audience" を区別し、全体の4分の3は一般の観客であると述べてはいる。(Dryden 241)
- 5 厳密には、Dryden がこの表現を使うのは、物語の規則を遵守することで "probability" は保たれるという文脈の中であるが、*Troilus* の序文全体を通してみれば、規則の逸脱を容認するという彼の意図が読み取れる。
If the Rules be well consider'd: we shall find them to be made only to reduce Nature into Method, to trace her step by step, and not to suffer the least mark of her to escape us: 'tis only by these, that probability in Fiction is maintain'd, which is the Soul of Poetry.... (Dryden 248)

Works cited

- Atkins, J. W. H. *English Literary Criticism: 17th and 18th centuries*. London: Methuen & Co. Ltd., 1951.
- Collins, A. S. *Authorship in the Day of Johnson*. London: Robert Holden & Co. Ltd., 1927.
- Dryden, John. *The Works of John Dryden*. Ed. Maximillian E. Novak and George R. Guffey. London: U of California P, Ltd., 1984.
- Pope, Alexander. *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. New Haven: Yale UP, 1963.



Toni Morrison の三部作
——三部作の繋がりとしてみる
ビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータ——

齋藤幸恵

SYNOPSIS

Toni Morrison's *Beloved* in 1987, *Jazz* in 1992 and *Paradise* in 1997 are well-known as a trilogy. Critics regard these works as a trilogy but the papers which take up the three novels as a trilogy are very few. This paper focuses on a similarity between *Beloved*, *Jazz*'s narrator and Consolata and explains that Morrison personifies the past as these three characters in her trilogy and tries to heal the traumatic past itself. In the end, it will demonstrate the importance of reading *Beloved*, *Jazz* and *Paradise* as a trilogy. First, we examine the position of these three characters in each work with regard to the relation between their role and historical backgrounds in these works. *Beloved*, *Jazz*'s narrator and Consolata are so different from each other in some points that we cannot note the connection between them at first sight. Since, however, they are the personifications of the lost past, we can assume that they function as the past in each work and that their differences are results of their function.

Next, this paper observes their internal development from being damaged to being healed. These three characters long for love and their hunger can be regarded as the craving to get reconnected to mother and to develop a sense of identity inside them. Through these three novels, they gradually develop and arrive at the healing. Finally, this paper will show a possibility of healing the past, the kind of healing that Morrison has consistently suggested in her works, and the necessity of the readers to realize such healing.

はじめに

Toni Morrison の三部作と言えば『ビラヴド』(*Beloved*, 1987)、『ジャズ』(*Jazz*, 1992)、『パラダイス』(*Paradise*, 1997) を指すというのは周知の事実であるが、書評などの情報を得ずに作品を読んだだけでそのことに気付く者は少ないだろう。それほどまでにこの三部作には共通点が少ない。1987年に Gail Caldwell が Morrison にインタビューしたところによると、三部作という設定は『ビラヴド』の創作過程が基になっているという。Morrison は『ビラヴド』というタイトルの「3巻からなる物語」に取り組んでいたが、*μ*切に間に合わないと思っていた。(Caldwell, 240)それを聞いて、編集者が3巻の長編を3冊の作品に分けて出版するように勧めたというのが三部作誕生のエピソードである。その後、三部作の完成には10年という月日を要し、様々な点で当時考えていた作品とは違ったものになったと推測されるが、Morrison は「今でも『ビラヴド』は三作品のうちの第一作目だと考えている」ことから、この3つの物語を繋ぎ合わせることによって何か特別なものを表現しようとしていたのだと考えて間違いない。(Caldwell, 241)

これまで、三部作としての解釈を展開する論文はほとんどなかった。三部作とはいえ今やそれぞれが独立した作品であるということに加え、Morrison の作品は一作を扱うだけでも骨が折れるほど複雑であり、その難解さが三部作としての解釈を一層困難にしている。しかし、これらの作品を三部作という一つの大きな作品として解釈することは困難ではあっても不可能ではない。実際、三部作を主題にした論が発表され始めている。Christian Barbara は Morrison の三部作はアフリカ系アメリカ人にとって特別な意味を持つ時代を描いた歴史三部作、あるいは愛というテーマを様々な角度から描いた愛三部作であると考えている。Justine Tally は各作品を異なる言語理論の実践として解釈しているし、Sharon Jessee は Morrison の作品に描かれる宗教観について考察し、三部作の中で描かれている宗教はキリスト教だけでなく、グノーシス主義、アフリカを起源とする宗教的な風習など様々なものが融合された形であるという論を展開している。

さらに、Linda J. Krumholz は三作品の構成に共通の要素を見出している。その論によれば、三部作はどれも登場人物たちが悲惨な経験を再び繰り返すことによって過去を克服するという構成になっている。

『ビラヴド』では、過去に娘を殺してしまったセサがガーナー氏を見て再び「先生」がやって来たのだと勘違いする時、セサは「武器をわが子ではなく、その代わりにわが子を脅かす白人男性へと向けている」(Krumholz, 21)『ジャズ』は最後にまた殺人が起きると語り手の予想に反してハッピーエンドを迎えるが、これは「ジョー、『ヴァイオレット』、ドーカスという殺人に至る三角関係がジョー、ヴァイオレット、フェリスという家族愛に変わった」というように物語が「差異のある反復」をして見せるからである (Krumholz, 21)『パラダイス』の冒頭で男たちが修道院を襲撃する時、彼らに待っているのは破滅だが、物語は過去へと戻る。そこで「殺人の場面を再現し」、女たちの死体の消すことで殺人者となるはずだった男たちにやり直しのチャンスが与えられる。(Krumholz, 21) セサやジョー、ディーコンたちは物語の過程でトラウマ的な過去を克服し、癒しの予感を感じさせる結末に到達するので、同じタイプに属する登場人物たちだと言えるだろう。Krumholz はそうした彼らの変化こそ三部作の接点だと主張しているのである。しかし、彼らは自ら進んで過去と向き合い、自力で乗り越えたのではない。そこには半ば強引に登場人物たちを過去と向き合わせ、登場人物たちの現在の中に過去を持ちこんでくる存在がある。すなわち、ビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータという三人である。本論では Morrison の三部作である『ビラヴド』、『ジャズ』、『パラダイス』をビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータを軸にして読み解き、Krumholz が主張する「差異のある反復」と「過去の克服」が一登場人物の域に留まらず、より広い領域で描かれていることを明らかにしていく。

1. 過去として癒す

ビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータが過去と関係が深い登場人物だと仮定すると、まず頭に浮かぶのは『ビラヴド』の題辭、“Sixty Million and more”であろう。Teresa N. Washington はビラヴドを「人間であり、霊である。認められているが、忘れられたもの」であると表現している。(Washington, 182) ビラヴドは中間航路で死んだ六千万人以上のアフリカ人たちを象徴しており、Morrison はビラヴドを描くことで奴隷制の時代に亡くなったアフリカ人とアフリカ系ア

メリカ人に慰めを与えているというのである。さらに、藤平育子は「ピラヴィドは『奴隷たち／奴隷船に載せられたアフリカの人々』の総体から抜け出て、殺されたひとりの娘に戻り、家族の中で固有の名前を呼んで欲しい、そして心の内側の苦悩を記憶してもらいたい」という思いの為に現れると主張している。(藤平 95) ピラヴドが“Sixty Million and more”を表しているならば、ピラヴドは過去を作品の登場人物として蘇らせたものだと言えるはずだが、思い出してもらう為に帰って来たピラヴドは作品の最後で人々から忘れられ、消えてしまう。セサやジョー、ルービィの人々が自分の過去を繰り返して癒しを得たように、ピラヴドが癒されるには後の作品で「反復される」必要があるのだ。『ジャズ』の語り手、コンソラータと姿を変えてはいるが、過去そのものは三部作の中で「反復」され、一作目では忘れ去られてしまった結末を書き変えていく。ピラヴドに表された過去は、『ジャズの語り手』、そしてコンソラータへと引き継がれていくのである。

ピラヴドだけでなく 3 人ともが過去を擬人化したものであると主張する時、3 人の差異というのは重要な意味を帯びてくる。Marsha Darling がピラヴドについて尋ねると、Morrison はピラヴドがセサの娘だと断言することは出来ないが、セサにとっての「ピラヴドはセサの死んだ娘のようにテキストの中で機能しなければならない」のだと答えた。(Darling, 247) つまり、3 人は異なる状況下で異なる機能を果たすように求められているからこそ、明らかに同じ種類のものとして描かれていないのだ。ピラヴドがセサの死んだ娘として機能しているのはセサの過去がピラヴドの人間性に影響を与えているからだとすれば、『ジャズ』の語り手やコンソラータもまた他の登場人物のもつ過去に影響を受けているということになる。そのような機能的な側面を考慮にいと、ピラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータにとって、互いに似ていないということは当然のことであり、3 人の差異というのはむしろ 3 人が同等の描かれ方をしているという証拠にもなり得る。

『ピラヴド』の舞台は 1870 年代、奴隷制が崩壊した直後を舞台にしている。多くの批評家が指摘しているように、『ピラヴド』の登場人物たちは既に自由を獲得し、新しい人生を生きているが、彼らの奴隷としての痛ましい過去は未だ心の奥底に眠っている。まさにその過

去を体現するビラヴドの存在は、他の登場人物たちが意識的に抑圧している過去に影響をあたえていく。Washington は「セサの口頭のリメモリーは明らかにビラヴドの移ろいやすい精神的な自己を固める手助けをしている」と解釈し、ビラヴドがセサに多くの質問をするシーンはセサが過去を思い出す必要性を表している」と述べている。

(Washington, 181) また、ポールDは無意識のうちにビラヴドと過去との繋がりに気付いており、ビラヴドは「俺に何かを思い出させる」と言う。(277) しかし、過去を表しているが故にビラヴドは人々にとって危険な存在である。セサはビラヴドの世話をすることで衰弱し、ポールDはセサの家から追い出され、町の30人の女たちはビラヴドを悪魔として追い出す決心をする。この物語の人々にとって、ビラヴドに体現された過去は奴隷であったという痛みで満ちた経験である為に思い出したくないものなのだ。ビラヴドは1870年代のアフリカ系アメリカ人にとって、トラウマの象徴として描かれていると言えるだろう。それはビラヴドが去った後、人々が「悪い夢のように彼女(ビラヴド)のことを忘れた。話を作り上げ、形作り、装飾した後に、あの日ポーチで彼女を見た者は速やかに、意識的に彼女のことを忘れた」ことから明らかである。(323)

モリスンはビラヴドを危険な存在である一方で、アフリカ系アメリカ人たちにとって重要な価値のある存在のように描いている。ポールDはビラヴドを抱いた時について次のように回想している。

Each time she came, pulled up her skirts, a life hunger overwhelmed him and he had no more control over it than over his lungs. And afterward, beached and gobbling air, in the midst of repulsion and personal shame, he was thankful too for having been escorted to some ocean-deep place he once belonged to. (311)

「ある海の深い場所」はポールDが「昔、属していた場所」であることから、彼にとって今はもう失われてしまった場所だと推測される。ポールDは無意識のうちにビラヴドを忘れるということはトラウマ的な過去から自己を守る手段として有効だが、自分のルーツである祖先との繋がりを切り切ってしまうことでもあるのだと気付いていた

のではないだろうか。ピラヴドはやはり過去として機能しているのである。ピラヴドが表しているものはアフリカ系アメリカ人を苦しめている奴隷制の痛ましい過去でもあり、アフリカ系アメリカ人のアイデンティティを強化するルーツとしての過去でもあるのだ。

タイトルから分かるように、『ジャズ』の舞台は1920年代、ジャズに代表される黒人文化が注目され、ニューヨークでハーレム・ルネッサンスが興ったジャズ・エイジである。作品の冒頭では、シティは新しく、そこに住むアフリカ系アメリカ人たちは皆幸せであるということが強調されており、語り手は「新しいものが来た。見て。悲しい事は去った。悪い事も。誰にもどうしようもないということも。その時、その場所での皆の状況。忘れなさい。歴史は終わった。あなたたち皆、やっと全てがよくなるのだ」と話す。(7)『ジャズ』の舞台として描かれる1920年代はアフリカ系アメリカ人が苦く苦しい過去を忘れて新しい人間に生まれ変わることが出来る新しい時代である。語り手は客観的に描写されることはなく、自分のことを「筋肉がない」、「長い間、多分長すぎるくらい、自分の心の中に住んでいた」と述べており、読者に語り手が幽霊であるかのように思わせる。語り手はセサの家にとりついてきた具現化する前のピラヴドを連想させるが、セサの家の悪霊とは違って迷惑でもなければ、大切な存在でもない。語り手のことを誰も知らない。『ジャズ』の語り手と他の登場人物たちの間にある距離は、登場人物が過去から分断されているということの表れとして見る事が出来るだろう。

しかし、『ジャズ』におけるアフリカ系アメリカ人たちが完全に過去を捨てられたなら、語り手はこの物語に存在してはいけない。語り手の存在は人々が過去を捨てられないということの証明なのである。Shirley Ann Staveが言うように、この時代は「都市の華やかさと中流階級の多くの人生が洗練されていたことで良く知られている一方、まだ語られずにいる他の人生もあり、それは経済的不安、内在化した肌の色の問題、性差別、不況、暴力的な人々など、後に残してきたと思っていたもので溢れている華やかとは言い難いもの」であったのだ。

(Stave, 60-1) 語り手はヴァイオレット、ジョー、ドーカスの幸せな面ではなく、痛みで満ちた過去を徐々に明らかにしてゆく。

Tally は『ジャズ』の冒頭で語り手が発する“Sth”という音は「多様

な解釈がより合わさったものであり、『セサ』と『南部』の両方の子音と考えられる」と主張している。(Tally, 78) プランテーションで栄えた南部は『ピラヴド』で描かれた奴隷制のトラウマ的な過去と深い関連のある場所であり、また、ジョーとヴァイオレットがシティへ行く為に家族を置いてきた場所でもある為、過去の良い側面、祖先やルーツも表していると言える。ジョーは故郷で母であるワイルドを追いかける時、その手掛かりを「臭跡」という言葉で表しているが、その「臭跡」はシティにも表れる。ドークスを探してシティをさまよいつつながら、ジョーは「俺は臭跡を探してなんかいなかった。向こうの方が俺を探していて、最初、それが話し始めた時、俺はその声が聞こえなかった」と言う。(130) シティでジョーを見つけた臭跡というのは、ジョーをこっそりと観察する語り手を連想させる。「臭跡」とは、アフリカ系アメリカ人の背負った過去であり、母へと、さらには祖先へと繋がる道なのである。物語の終盤で、語り手は人々が本当は過去に囚われ続けているということに気付く。

I thought I knew them and wasn't worried that they didn't really know about me. Now it's clear why they contradicted me at every turn: they knew me all along. Out of the corners of their eyes they watched me. And when I was feeling most invisible, being tight-lipped, silent and unobservable, they were whispering about me to each other. (220)

ここで語り手はシティの人々と過去との関係を述べているのだと考えられる。この言葉によって、語り手は『ジャズ』のアフリカ系アメリカ人たちが奴隷制による痛ましい過去から自由になったわけではなかったということを証明しているのである。また、語り手という立場も過去がアフリカ系アメリカ人たちにとってどれほど深刻で重要なものかということを表していると言える。確固たる描写がないにしても、語り手がいなければ物語は存在しないのだから。

『パラダイス』は1970年代が舞台となっているが、1960年代と1970年代、公民権運動とその後を作品全体の背景として捉えるべきであろう。Martin Luther King, Jr.やMalcolm Xがアフリカ系アメリカ人の英雄となり、アフリカ系アメリカ人が平等を求めて積極的に活動したの

が 1960 年代であった。奇妙なことに、物語の中心となる町、ルービィは他の町から孤立した黒人だけの町であり、Stave が述べているように「差別より同化が進んだ」この時代とは、表面上は正反対である。

(Stave, 68) しかし、厳しい家父長制と男尊女卑の社会を築き、黒人の血の純潔を守るルービィは黒人が白人にとって代わった町であり、肌の色以外は白人と完全に「同化」してしまった町だということが分かる。その為、ルービィの男たちは自分の父たちが町の建設した過去は誇りに思っても、奴隷制やセサやジョーが持っていたようなトラウマ的な過去は自分たちとは関係がないと断言している。自分たちが黒人であること、しかも「八岩層」のような真っ黒な肌の色をしていることを恥じる気持ちが勝ってしまうからである。(193) しかし、過去を捨てることはアフリカ人、あるいはアフリカ系アメリカ人の受け継がれてきたアイデンティティを捨てることでもある。だから新参者のマイズナーが感じたように、ルービィでは「語るべき自分たち自身の話がない」のだ。(161)

ルービィの男たちにとって、過去を表すコンソラータが敵に見えるのは当然のことだ。彼らは修道院の女たちがルービィの墮落を引き起こしていると考え、コンソラータが自分たちを苦しめ、恥じ入らせていると感じている。アメリカで奴隷制の間に存在した異人種間混交というのはたいていが白人男性によるレイプや合意のない性行為の結果であったことを考えると、「緑の目」、「紅茶色の髪」、「燻した夕日色の肌」といったコンソラータのムラートのような容姿は奴隷制を思い起こさせるものとしては十分だろう。(223) コンソラータは文化の点でも白人と黒人の混合物であり、La Vinia Delois Jennings によれば、「混合主義、カトリックとアフリカ系ブラジル人のカンドンプレの併用とブラジルにある固有の概念を表している」という。(Jennings, 166) 男たちは自分たちを恥じ入らせる過去を消し去るために修道院を襲撃する。修道院への攻撃は過去に対する攻撃なのである。

仲間と共に修道院へ押し入ったディーコンは、スチュワードが撃ち殺す直前、コンソラータの目を見た。「ディーコン・モーガンはサングラスが必要だったが、それはシャツのポケットに収まっていた。彼はコンソラータを見て、彼女の目の中に彼らや彼自身から抜き取られてしまったものを見る」(289) ルービィの男たちは修道院の女たちが

悪魔であり、自分たちの敵であると当然のように思っているが、ディーコンはそれとは違う何かをコンソラータの目の中に見つける。彼女がディーコンに無意識の劣等性を感じさせるので、ディーコンはサングラスをかけて屈辱から身を守ろうとする。しかし、サングラスを取り出せず、ポールDが「かつて属していた海の深い場所」へ行ったように、彼はコンソラータの目の中に「彼自身から抜き取られてしまったもの」、かつては自分も持っていたものを見る。ディーコンは恥だけではなく、自分の祖先も含まれている過去を見つけるのである。だからこそ、過去を表すコンソラータはディーコンが自分の目の奥に何かを見つけたことに気づき、こう言うのだ。「あなた、帰って来たのね」と。(289)

2. 過去として癒される

ビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータは三部作の中で繰り返し描かれる過去だと主張したが、それは過去を擬人化することの一面に過ぎない。さらに重要なのは、過去である彼女たちはセサやジョー、ディーコンたちが作品の中で強く成長していくように、作品の中で変化していくことが許されているということだ。彼女たちは過去として他の登場人物に癒しのきっかけをもたらすだけではなく、作品ごとに変化していく存在、傷ついたトラウマ的な過去から、人々に慰めを与える過去へと癒されていく存在なのである。セサやジョー、ルービィの人々が過去を乗り越える為には、自分自身を慈しみ、自己を育てることが必要であったように、ビラヴドたちが三部作の中で徐々に癒されていく様子も自己の確立の過程として見る事が出来る。

Morrison が自己の確立を描く時、そこには愛の働きが深く関係している。三部作のテーマとしての愛は Christian が詳しく述べているが、その中でも母の愛は Morrison の作品に不可欠である。Stave は『ジャズ』における「大人たちの愛は代用の概念として作用して」おり、それは「母の体への回帰という究極の欲望」によって導かれる結果だと述べている。(Stave 62) 興味深いことに、Morrison の作品では殆どの登場人物が愛に飢えており、意識するしないにかかわらず愛を探し求めている。Morrison が描く母の愛を Andrea O'Reilly は“motherlove”と呼び、子供に自身には価値があり、愛されるべき人なのだという事

を教えることで人種差別がはびこる世界で子供を肉体的、精神的に確実に生きながらえさせるということを目的とした愛であると説明している。(O'Reilly, 33) Morrison の描く愛は、黒人の母たちが人種差別に対して行う対抗策なのだ。そのような愛にはアフリカ系アメリカンとしての誇りを受け継ぐという目的も含まれている。O'Reilly の言葉を借りれば、「Morrison が motherlove に不可欠だと考えている自己愛は祖先の記憶や昔からの特質から生まれるもの」である。(O'Reilly, 33)母は単に愛を伝える存在ではなく、子供たちを祖先、つまり黒人のルーツと結びつける働きする存在なのだろう。ルーツはアイデンティティを示すものであるため、祖先と繋がっている子供たちは自分たちの中に自己の感覚を強く育むことが出来る。特に黒人の人々にとって、母とはルーツの象徴であると言えるのだ。愛を求めるということは母との繋がりを取り戻し、確固たる自己を内包したいという切望が基になっているのである。このような考えをもって三部作を読むと、ビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータたちが人々に過去として働きかける一方で、自分を取り戻し、失われた祖先や子孫と再び繋がりが合う過程を辿っていると分かるだろう。

まず、セサの愛を欲しがらるビラヴドについて考えてみたい。荒このみは愛を欲するビラヴドは「人間の身体で、もっとも明確に個人を主張する部分である顔にこだわっているのであり、身体の部位でも顔に自分の根本的な存在理由を認識するビラヴィドの、それは意思表示であると理解することができるだろう。自分であることの主張である」と述べている。(荒 138-9) 加えて、ビラヴドが度々名前を呼んでほしいと人に頼むことから、自己の重要なサインである名前にも執着していることが分かる。セサの死んだ娘としてのビラヴドは生前「もうハイハイしてる子」と呼ばれており、その本当の名前は明かされない。

(110) 結局、物語の最初から最後まで「だれもが彼女が何と呼ばれていたか知っていたが、誰も彼女の名前を知らなかった」のであり、ビラヴドは正確には名前がないということになる。(323) 名無しのビラヴドは、自己がない不安定な状態なのだと推測することが出来る。

名前だけでなく、ビラヴドの体も自己と愛の関係性を表している。肉体的存在としてのビラヴドは誰かに愛されることによって、セサとデンヴァーの愛によって支えられている。歯が突然抜け落ちた時、ピ

ラヴドはそれが分裂のしるしなのだと考える。

Beloved looked at the tooth and thought, This is it. Next would be her arm, her hand, a toe. Pieces of her would drop maybe one at a time, maybe all at once.[. . .] It is difficult keeping her head on her neck, her legs attached to her hips when she is by herself. (157)

この引用の中で、ビラヴドは自分の中心に確固たる自己が存在していないことを示している。ビラヴドは自分の中にある自己を認めたり、愛したりすることがない為、自分の力で体を一つにまとめておくことが出来ないのだ。彼女は無意識のうちに愛が自分を崩壊から救ってくれるのだと気付いているが、それが自分から発せられる愛だということには決して気付かない。ビラヴドに出来ることは、ただ「彼女の肩に回されたデンヴァーの腕がバラバラになることから防いでくれますように」と願うことなのである。(157)

ビラヴドのセサと一つになりたいという欲望はあまりに強く、自分とセサを混同してしまう。ビラヴドの独白はこの強い願いに満ちており「わたしは彼女から離れない」、「彼女の顔は私の顔」、「私は彼女の顔がある場所にて、その顔を見ていたい」と言う。(248)しかし、30人の女たちがセサの家に来て来て、ついにビラヴドは消えてしまう。その直前、ビラヴドはセサが自分から離れ、「今、彼女の手は空だ。」と感じる。(30) ベイビー・サグズが自由州のオハイオに来て来た時、突然「この手は私の手」という感覚を得るというエピソードとは対照的に、ビラヴドの「空の手」は自己が十分に成長していないことを表している。ビラヴドはセサに愛されていたが、結果として、この段階ではビラヴドの中の自己は育つことがなかったのである。

ビラヴドに比べ、『ジャズ』の語り手は他の登場人物のことについては雄弁であるのに、自分自身についてはほとんど語らない。しかし、ジョー、ヴァイオレット、ドーカスの三角関係の結果を追いかけることから、語り手が愛というものに興味を抱いているということは明らかであろう。興味深いことに、ビラヴドは「顔」を手に入れることに固執していたが、語り手は「そんなものは信じない」と言う。(228) 何故なら、肉体というのは「みじめさに縛りつけられ、喜んでそれに

しがみついている」からだ。(228) ビラヴドが空の手に言及している一方、語り手は最後のシーンで内側の自己について気付いているというようにも取れる言葉を発している。他人の「おおよけの愛」を羨み、自分の「密かな愛」を思い出す語り手は、「言うと私が作られる。もう一度作られる。あなたは自由にそうすることが出来、私は自由にあなたにそうさせることが出来る。何故なら、見て、見て。あなたの手がどこにあるか見て。ほら」と言う(229) 多くの批評家が指摘しているように、この最後の言葉は読者に対するメッセージと解釈することが出来る。さらには、これを語り手の自己に対する理解として捉えることも出来るだろう。「あなたの手がどこにあるか見て」という言葉は、『ビラヴド』で自分の手を見つけたベイビー・サグスを思い起こさせる。私たちはこの発言の意味を考え、語り手の自己においてこの言葉をどう解釈するか決めなければならない。ビラヴドと『ジャズ』の語り手が同じように愛に飢えているのだとしても、彼女らの飢えは正確に繰り返されるものではなくある種の変化を伴うものであり、『ジャズ』の語り手はビラヴドよりも自己を確立していると判断できる。言い換えれば、語り手はビラヴドの状態とコンソラータの状態の中間にあたり、『ジャズ』の結末は次の物語での自己の確立と母との再会を約束しているのである。

コンソラータはメアリ・マグナを愛し、ディーコンと恋に落ちるが、どちらも失敗に終わっている。ディーコンと「私は同じだ」と感じ(241)、メアリ・マグナの死後に「通りの子どもや従者とは違った意味で孤児」になったと感じるコンソラータは、ビラヴドや『ジャズ』の語り手と同じ孤独に打ちひしがれている。(247)しかし、コンソラータが癒され、結末に向けて変わって行く可能性はまだ残されている。コンソラータの癒しは他人を自分と同一視しなくなった時に始まるのだ。ある日、庭に出て空を見上げたコンソラータのもとに奇妙な男が現れる。読者はこの男が何者か知らされないが、コンソラータが自分の自己を意識するきっかけを作る人物であることは間違いない。男は鏡に映したかのようにコンソラータとそっくりの「紅茶色の髪」と「新鮮なリンゴのようにまるくて緑色の目」している。(252)『スーラ』の中で鏡を見たネルが「私」という自己に気付くように、コンソラータもこの時初めて「私」を意識したのだ。この後、それまでの意

惰で何事にも無関心な生活とは打って変わって、コンソラータは修道院の女たちの面倒をみて、料理を始める。誰かに愛されようとしたり、誰かと自分を同一視しようとしたりするのをやめることによって、コンソラータは自分の中にはまだ愛する価値のあるものが残っているということに気付いていく。修道院の女たちに辛い経験を語らせ、さらに海岸で歌う女、ピエダーデの物語を話して聞かせる。「あなたたちが何に飢えているのか教えてあげる」という宣言の後、コンソラータは修道院の女たちにとって母として機能していると言えるだろう。

(262) O'Reilly が指摘しているように、「『パラダイス』において、修道院の女たちの癒しはコンソラータ自身が癒えた時に始まる」のである。(O'Reilly, 164)

コンソラータの下で、修道院の女たちもまた変ってゆく。コンソラータから教わった「型取り」と「夢」の実践を通して、女たちは自分の辛い過去を見直していく。メイヴィスは娘の死について、ジジは暴動で少年の死を目撃したこと、セネカは姉に捨てられた時の記憶、パラスは母に恋人を取られたことをそれぞれ回想する。徐々に過去を克服するにつれて、少しずつ彼女たちの間に前にはなかった一体感が生まれてくる。以前は喧嘩し、互いに文句を言いあってばかりだったのに、今や「話しかける時には愛想がよくて信頼関係が結ばれているように見える、それか、平静で、理解しているという感じ」がするのである。(265-6) 彼女たちはそれぞれの自己を自分の中に発見し、他人の自己を尊重できるようになったのだ。J. Brooks Bouson の言葉を借りるなら、「コンソラータの教えの下で、修道院の女たちはオールブライト、グレース、セネカ、ディヴァイン・トゥルーラヴというそれぞれの名前に表されているような、愛すべき自己の一部を見つけた」のである。(Bouson, 210) そして女たちの自己を肯定し、成長させたコンソラータは、自らの自己をも手に入れたと言えるだろう。

振り返れば、初めから彼女たちの名前は癒しの可能性をはっきりと示していた。Nicole M. Coonradt は Morrison が“beloved”という言葉で「テキストを通して名詞と動詞の両方として」使っていると指摘しているが、「ピラヴド」と名付ける行為にも二つの意味を見出すことが出来る。(Coonradt, 170) まず、ピラヴドと名付けることで Morrison がこの登場人物は愛されなければならないと考えていることが分か

る。この場合、“Sixty Million and more”が愛される、すなわち思い出されることへの Morrison の願いを表していると言える。さらに、この名前はビラヴドの受動的な性質を表しているとも考えることも出来る。愛されることだけを望み、自発的な自己を持たないビラヴドにふさわしい名前である。

『ジャズ』の語り手に名前は無いが、その代わりに語り手と言う立場でありながら一人称を用いることで、自己を強調し、受動的なビラヴドから自分という存在を意識している「私」へと変化したことを表している。つまり、語り手の「私」は失われた過去の一部、アフリカ系アメリカ人のアイデンティティの一部を意味しており、受動的な“beloved”から“I”へと自己を発展させたということを表していると考えられるのである。さらに、幾人かの批評家は『パラダイス』の結末で船がコンソラータのいる岸辺へと近づいてくるシーンを引用し、コンソラータの名前の意味を明らかにしている。

When the ocean heaves sending rhythms of water ashore, Piedade looks to see what has come. Another ship, perhaps, but different, heading to port, crew and passengers, lost and saved, atremble, for they have been disconsolate for some time. Now they will rest before shouldering the endless work they were created to do down here in paradise. (318)

Jill Matus はコンソラータというのは“consoled”「慰められた」を意味し、私たちは彼女が「絶望した」人々、つまり慰めを得ていない人々を待っていると解釈できる為、上の引用文で使われている「“disconsolate”という言葉は良いごろ合わせ」だと述べている。(Matus, 167) また、Michael Wood は岸辺にたどり着く人々は「彼女(コンソラータ)を失い、必要としている。彼女の正体、知識を必要としている」と述べている。(Wood, 122) 三部作の中で過去はビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータとして繰り返し擬人化され、語られてきた。繰り返しの中で変化してきた過去は、ついに過去から切り離された人々を迎え入れることのできる母のような過去へと成長したのである。

結び 過去を癒すのは誰か

最後に、もう一度コンソラータがピエダーデと共にいる場面を振り返って彼女らが辿った道のりを確認し、三部作の中で過去を癒すというイメージから Morrison が何を訴えているかについて考えてみたい。先に引用した部分から、コンソラータはあの世界でピエダーデという名の母と再び繋がる事が出来たと考えられる。ピエダーデの隣でコンソラータは癒されて、誰かを癒すことも出来る。『パラダイス』のエピローグは三部作のエピローグでもある為、コンソラータの癒しはビラヴドや『ジャズ』の語り手にとっても重要であるはずだ。この三作品を通して、彼女たちは徐々に成長し、癒しへ到達するのである。『パラダイス』の結末、コンソラータが最後に現れる場所が死者のいる場所だとすれば、それはビラヴドが最初において、セサの「顔」を見ていた場所なのかもしれない。殺された過去がビラヴドとして蘇り、『ジャズ』の語り手となって「私」であるということを知り、コンソラータが誰かの母となり、再び殺されて、「あちら側」へと帰って行く。彼女たちは大きな円を描く物語の中で生き、物語の始まりであり、『パラダイス』のラストシーンである「愛の始まる場所」へと帰って来たのだ。(318)

Morrison の作品を読む際、読者は作品に深く関わることを要求されると言われている。物語への読者の参加は過去を擬人化したビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータがトラウマ的な過去の癒しの過程を表していると考えられる上でもやはり重要な要素であろう。三部作における彼女らの癒しの過程は読者を失くしては成り立たないものであるからだ。ビラヴドたちのセサたちに対する働きから分かるように、Morrison の作品における過去の克服は過去を思い出すということを経験している。Jennings が述べているように、もし「生きている子孫」が常に「祖先を思い出し、積極的に名前を呼ぶ」努力を怠らなければ、祖先は「死後の世界で個人としての永遠の命を得ることが出来る」というアフリカの伝統を受け継ぐ考え方が Morrison の作品にも生きているのである。(Jennings, 9) 三部作の中で過去そのものを変化させ、癒そうとするならば、読者はセサやジョー、ルービィの人々が思い出せない過去をどうにかして思い出さなくてはならない。この三

部作を読んだ者は、ビラヴド、『ジャズ』の語り手、コンソラータについてその正体は何なのか、最終的にどこへ行ってしまったのかと頭を悩ませることになるだろう。Morrison は意図的にこの謎に答えを出さないままにしている為、3人は強烈なインパクトをもって私たちの記憶に残ることになる。彼女たちは読者によって思い出される為に作品の中に登場するのである。つまり、私たちは読書を通して、Morrison が強調する「失われた過去」を疑似的に取り戻しているのだ。現実には失われた過去を取り戻すのは不可能であるが、Morrison は読者を深く巻き込むことにより、その過去の回復と癒しを創作という形で実現する可能性を見出したのかもしれない。読者がこの3人の登場人物の正体について悩んでいるうちに、失われた過去を表す最後の人物、コンソラータは「楽園」へたどり着く。(318)そこへ、「失われ、救われ、震える」人々がやってくる。(318)それは修道院の女たちだろうか。それとも奴隷制によって暴力的に祖先との繋がりを断たれたアフリカ人、その子孫となるアフリカ系アメリカ人の人々だろうか。それが誰であれ、「楽園」には待っていてくれるものがある。Morrison は過去に苦しんでいる人々、過去を捨てざるを得なかった為に孤独を感じている人々にピエダージェの名に表された「慰め」を用意してくれたのである。

Works cited

- Bouson, J. Brooks. *Quiet as It's Kept: Shame, Trauma, and Race in the Novels of Toni Morrison*. Albany: State U of New York P, 2000.
- Caldwell, Gail. "Author Toni Morrison Discusses Her Latest Novel *Beloved*." 1987. *Conversations with Toni Morrison*. Ed. Danille Taylor-Guthrie. The UP of Mississippi, 1994. 239-45.
- Christian, Barbara. "'The Past is Infinite': History and Myth in Toni Morrison's Trilogy." *Social Identities*, 6 (2000): 411-23.
- Coonradt, Nicole M. "To Be Loved: Amy Denver and Human Need-Bridges to Understanding in Toni Morrison's *Beloved*." *College Literature*, 32 (2005): 168-87.
- Darling, Marsha. "In the Realm of Responsibility: A Conversation with Toni Morrison." 1988. *Conversations with Toni Morrison*. Ed. Danille Taylor-Guthrie. The UP of Mississippi, 1994. 246-54.
- Jennings, La Vinia Delois. *Toni Morrison and the Idea of Africa*. New York:

Cambridge UP, 2008.

- Jessee, Sharon. "The 'Female Revealer' in *Beloved*, *Jazz* and *Paradise*: Syncretic Spirituality in Toni Morrison's Trilogy," *Toni Morrison and the Bible*. Ed. Shirley Ann Stave. New York: Peter Lang, 2006. 129-58.
- Krumholz, Linda J. "Reading and Insight in Toni Morrison's *Paradise*." *African American Review*, 36 (2002): 21-34.
- Matus, Jill. *Toni Morrison*. New York: Manchester UP, 1998.
- Morrison, Toni. *Beloved*. 1987. New York: Vintage Books, 2004.
- . *Jazz*. 1992. New York: Vintage Books, 2004.
- . *Paradise*. 1997. New York: Penguin Putnam, 1999.
- O'Reilly, Andrea. *Toni Morrison and Motherhood: a politics of the heart*. Albany: State U of New York P, 2004.
- Stave, Shirley Ann. "Jazz and *Paradise*: pivotal moments in black history." *The Cambridge Companion to Toni Morrison*. Ed. Justine Tally. New York: Cambridge UP, 2007. 59-74.
- Tally, Justine. "The Morrison's Trilogy." *The Cambridge Companion to Toni Morrison*. Ed. Justine Tally. New York: Cambridge UP, 2007. 75-91.
- Washington, Teresa N. "The Mother-Daughter Aje Relationship in Toni Morrison's *Beloved*." *African American Review*, 39 (2005): 171-88.
- Wood, Michael. "Sensation of Loss." *The Aesthetics of Toni Morrison: Speaking the Unspeakable*. Ed. Marc C. Conner. The UP of Mississippi, 2000. 113-24.
- 荒このみ (2007) 「ピラヴィドはなぜ黒いドレスで現れたか」、吉田迪子編『ピラヴィド』、ミネルヴァ書房
- 藤平育子 (2007) 「ピラヴィドは世界の形象なのか」、吉田迪子編『ピラヴィド』、ミネルヴァ書房



重名詞句移動の音韻論的分析
——焦点（対照強勢）の観点から——

西原 哲雄

SYNOPSIS

In this article, I start out discussing the issue of Heavy NP Shift from the viewpoint of phonological structure. It is commonly said that Heavy NP shift is explained by the concept of syntactic movement. However, Zec & Inkelas (1990) propose that an adequacy of Heavy NP Shift can be defined as branching at Phonological Phrases without using syntactic treatment. Furthermore, Guasti & Nespor (1999) suggest that the heaviness of Heavy NP Shift is measured not only in terms of the number of phonological phrases but also in terms of stress, and Kenesei & Vogel (1993) also suggest that contrastive stress (focus) restructures Phonological Phrases. According to these proposals, I will show that movement of Non-Heavy NP Shift (light element) is also explained in terms of restructuring of Phonological Phrases suggested by Kenesei & Vogel (1993).

0. 序

本稿では、重名詞句移動(Heavy NP Shift) についての考察を行う。一般的に、重名詞句移動 (Heavy NP Shift) は Ross (1986)などにおいては、語順を決定する統語的機能であると考えられてきており、いわゆる「重い」名詞句である、重名詞句は文の右側に移動させられることがあると、指摘されている。中村・金子編 (2002) によれば、(1a) の重い名詞句 *a book about linguistics* を文末に移動させて、(1b)が派生されるような例である。

(1) a. John gave a book about linguistics to Mary.

b. John gave *t* i to Mary a book about linguisticsi. (中村・金子編 2002)

上記で見られた名詞句である、*a book about linguistics* は *a book* とい

う語と比べると、明らかに重い名詞句であると考えられる。そして、*a book* のような「軽い」名詞句は文末への移動はされないと説明される。また、重名詞句移動における「重さ」というものは統語的観点からだけでなく、音韻論的観点からも説明は可能であると思われる。それは、*the word linguistics* という名詞句では、重名詞句移動の適用はされないが、*the word pneumoultramicroscopic silicovolcanoconiosis* (珪性肺塵症：けいせいはいじんしょう) という英語の単語の中で一番長い場合には、重名詞句移動の適用がなされる。

(2) a. *I found in the dictionary the word linguistics.

b. I found in the dictionary the word
pneumoultramicroscopic silicovolcanoconiosis.

(中村・金子編 2002)

1. 軽い名詞句の移動と音韻句

前節で見たように、重い名詞句でないもの、すなわち短く、軽い名詞句などは、重名詞句移動を受けないと説明されてきた（以下、(3)を参照）。

(3) a. *He threw into the wastebasket [the letter]. (Ross 1986)

b. *He threw into the wastebasket [it]. (Golston 1995)

c. *We elected president [my father]. (Ross 1986)

d. *The American people recently elected to the presidency [him].

(畠山 2006)

しかし、Rochemont & Culicover (1990)や Takano (1998)は、重名詞句移動が起きるのにはある種の焦点が必要となると指摘しているが、これは英語が文末焦点(end-focus)を求めるところから、当然であるといえる。そして、Zec & Inkelas (1990) は統語的な条件ではなく、移動させられる（重）名詞句は、枝分かれしている音韻句 (branching at the Phonological Phrases)であると(4)のような音韻句の定式化を提案し、援用することによって、音韻論的な観点から重名詞句移動の適格、不適格を説明しようとしており、Akasaka & Tateishi (2001)もこのような音韻論的な説明に同調している（以下、(4)、(5)を参照）。

(4) Phonological Phrase Algorithm

- a. Branching Clause: From the bottom up, branching nodes are mapped into phonological phrases.
- b. Anti-Stranding Clause: No two phonological words on opposite sides of an XP boundary may be phrased together to the exclusion of any material in either XP.

(Zec & Inkelas 1990)

(5) a. *Mark showed to John [some letters]PP.

b. Mark showed to John [[some letters]PP [from Paris]PP].

c. Mark showed to John [[some letters]PP [from his beloved city]PP].

(Zec & Inkelas 1990)

しかしながら、Guasti & Nespors (1999)は、移動させられた名詞句が音韻的に枝分かれしいる重いものではなく、軽い名詞句でも対照強勢 (contrastive stress)を受けることによって、容認可能になると指摘しているし、中村・金子編 (2002)も Culicover (1997) を引用して同様の主張をしている (以下、(6) を参照)。

(6) a. I put on the table [some BOOKS]. (not a Christmas card)

(Guasti & Nespors 1999)

b. I gave to John, a BOOK, and I gave to Susan a MAGAZINE.

(中村・金子編 2002)

2. 音律範疇と対照強勢 (焦点) による音韻句の再構築

音韻句を音韻規則としての適用領域としているものとして、強強勢 (Strong: S)の衝突を避ける以下のような、英語のリズム規則 (English Rhythm Rule: RR) が挙げられる。

(7) W S S → S W S

(8) a. thirtéen wómen → thírteen wómen

b. Tennesée législatúre → Ténnessee législatúre (Kenesei & Vogel 1993)

そして、一般にこれらの語が同一の音韻句の内にある場合に限り、英

語のリズム規則は適用されると考えられている。しかし、先に述べた対照強勢と同様に、ある語（音韻句）に焦点 (focus) が当てられることによって、音韻規則の適用が行われ、それは音韻句の再構築によるものであると、Kenesei & Vogel (1993) は指摘している。焦点を受けた語（音韻句）は左側の音韻句に融合して、1つの新たな音韻句を構成することによって、英語のリズム規則(Rhythm Rule: RR)の適用が行われると主張している（以下、(9)を参照、[] は音韻句を示す）。

- (9) a. [The racketeer]PP [ácted]PP [innocent]PP ,but he really wasn't. (not applied)
 b. [The rácketeer ÁCTED]PP [innocent]PP ,but he really wasn't. (applied)
 [+F]
 c. [The bills]PP [were left unpaíd]PP [lást month]PP (not applied)
 d. [The bills]PP [were left únpaid LÁST month]PP (applied)
 [+F] (Kenesei & Vogel 1993)

また、イタリア語の強勢調整規則(Stress Adjustment Rule)にも同様の現象が見られる（以下、(10)を参照）。

- (10) a. [i colibrí vérdi]PP → cólibri vérdi (the green hummingbirds)
 b. [I colibrí]PP [cántano]PP → no change (Hummingbirds sing)
 c. [I colibrí CÁNTANO]PP → ...cólibri... (Hummingbirds SING)
 [+F] (Vogel 1994)

さらに、Vogel (1994) はイタリア語で見られる語頭の子音長音化規則(Raddoppiamento Sintattico: RS) も、その適用領域は音韻句とされているが、(12a) は二つの音韻句にまたがっているために、規則は適用されていないが、(12b) では、後続する音韻句の中の語に焦点が当てられて、音韻句の再構築がされて、一つの音韻句になり、規則の適用がなされていると述べられている。

(11) Raddoppiamento Sintattico (RS)

C → C: / [V # ____ [+son]] PP
 [stress]

(12)a. [I colibrí]PP [cántano]PP (Hummingbirds sing)

b. [I colibrí CÁNTANO]PP (Hummingbirds SING) → ... [k:] ANTANO
[+F] (Vogel 1994)

このように、Vogel (1994)は、イタリア語においても、対照強勢（焦点）による、音韻句の再構築が見られるものであると、指摘し、以下のような焦点による音韻句の再構築規則の定式化を述べている。

(13) Italian Focus Restructuring Rule

If some word in a sentence bears focus, place a PPh boundary at its right edge, and join the word to the PPh on its left. Any items remaining in a PPh after the item bearing focus has been regrouped retain their PPh status.

(Vogel 1994)

また、Kenesei & Vogel (1993) でも、英語のリズム規則適用に係わる、音韻句の再構築についても、以下のような二点の定式化によって説明が可能であるとしている。

(14) Focus Restructuring Rule: English

If some word in a sentence bears focus, place a PPh boundary at its right edge, and join the word to the PPh on its left. Any items remaining in a PPh after the item bearing focus has been regrouped retain their PPh status.

(15) Focus Restructuring Rule: English (part 2)

If the remaining PPh is nonbranching, it may be joined into a single PPh with a PPh on its right.

(Kenesei & Vogel 1993)

上記の二点の規則にしたがうと、焦点による音韻句の再構築は以下のように図示されることになる。

(16) [X1 X2] [X3 X4] [X5 X6]

+F

→ [X1 X2 X3] [X4] [X5 X6]

+F

→ [X1 X2 X3] [X4 X5 X6]

+F

(Kenesei & Vogel 1993)

Kenesei & Vogel (1993)によれば、これらの再構築規則によって、次に挙げる2つの英語のリズム規則の適用も的確に説明できる。

(17) a. They managed [to outcláss] [DÉLAWARE'S cantéen] [éasily]

→b. ... [to útclass DÉLAWARE'S] [cantéen] [éasily]

→c. ... [to útclass DÉLAWARE'S] [cánteen éasily]

(Kenesei & Vogel 1993)

また、音韻句以外の音律範疇の再構築化についても、ハンガリー語における、側音の口蓋化規則 (l-Palatalizaion) がその適用領域を音調句 (Intonational Phrase: IP) としており、これもその規則適用に焦点が係わっており、以下に見るように現象が指摘されている。

(18) l- Palatalization (LP)

l → j [... ___ j ...] IP

(Vogel & Kenesei 1987)

Vogel & Kenesei (1987) では(18) のような定式化がなされたが、Kenesei & Vogel (1993) では、ハンガリー語においては、音韻句と音調句は通常の発話では、同一の範疇となると指摘しており、Kenesei & Vogel (1993) では、その適用領域は音韻句であると述べており、以下のように、Pal に焦点が当てられた場合に焦点における音韻句の再構築化によって、この単語の側音には口蓋化規則が適用されると述べている。

(19) a. [A teren]PP [Pal]PP [jatszík]PP [az angol jatekkal]PP¹⁾ (LP not applied)

the square-in Paul plays the English toy-with

“In the square Paul is playing with the English toy.”

b. [A teren]PP [PAL jatszík az angol jatekkal]PP (PAL = LP applied)

[+ F]

“It is Paul that is playing with the English toy in the square.”

(Kenesei & Vogel 1993)

(19) における現象を説明するために、Kenesei & Vogel (1993) は次の

ような焦点によるハンガリー語の音韻句の再構築規則を提案している。

(20) Focus Restructuring Rule: Hungarian

If some word in a sentence bears focus, place a PPh boundary at its left edge and join it into a single PPh with all the PPhs on its right.

(Kenesei & Vogel 1993)

さらに、Vogel (1988) によれば、ハンガリー語の阻害音の同化規則は文という統語的単位を越えて規則が適用されることがあり、これは通常は文という統語的単位は、音韻論的単位の1つである音韻的発話 (Phonological Utterance: PU) に一致することから考えれば、以下のよう、この規則の適用領域は文をまたがった2つのあらたな音韻的単位である音韻的発話の再構築によるものであると言える。

(21) Obstruent Assimilation

[-son] → [α voice] / [... ___ [-son / α voice]]PU

(22)a. Janos “John” [ʃ]

b. Itt van Janos. Beszel juk meg azt a dolgot most rogton.

→ [Itt van Janos]PU [Beszel juk meg azt a dolgot most rogton.]PU

→ [Itt van Janos Beszel juk meg azt a dolgot most rogton.]PU [ʃ] → [ʒ]

“Here’s John. Let’s discuss this thing now.” (Vogel 1988)

Kenesei & Vogel (1999)はこれらの再構築に理由については、言及していないが、音声学的観点及び情報構造の観点から見ると、焦点を受けた語がゆっくりとかつ長く発音され、新情報の役割を担うことから語末（音韻句の右端）に音声的区切りが生じると説明できる。

そこで、次節では、この焦点を受けることによって、音韻句が再構築されるという、この枠組みを重名詞句移動の現象にも、援用することで、軽い名詞句の文末への移動が説明できることを論証する。

3. Kenesei & Vogel (1993) の枠組みによる分析

そこで、まず(3), (6)に挙げた例について、Kenesei & Vogel (1993)の枠組みを援用すれば、以下に見られるように、語末の語（音韻句）が対照強勢（焦点）を受ければ、音韻句の再構築が行われ、左側の音韻句と融合して、さらに大きな音韻句が構築され、Zec & Inkelas (1990)の提案する音韻句の条件を満たすことになり、適格文として、容認することが可能であると、提案するものである（以下、(23)を参照）。

- (23) a. He threw [[into the wastebasket]PP [the LETTER]PP]. (not the book)
 b. He threw [[into the wastebasket]PP [THAT]PP].²⁾ (not others)
 c. We elected [[president]PP [my FATHER]PP]. (not my mother)
 d. The American people recently elected [[to the presidency]PP [HIM]PP].
 (not her)
 e. I put [[on the table]PP [some BOOKS]PP]. (not a Christmas card)
 f. I gave [[to John]PP [a BOOK]PP],
 and I gave [[to Susan]PP [a MAGAZINE]PP].
 (a BOOK for John and a MAGAZINE for Susan)

さらに、Akasaka & Tateishi (2001)において、容認不可とされている以下の例が、容認可能な文として、解釈が可能となる。

- (24) a.*? I introduced to Bill [DP [DP my] [NP fiancée]].
 →b. I introduced [[to Bill]PP [my FIANCEE]PP]. (not my parent)
 c. * I looked up in the dictionary *tsetse*.
 →d. I looked up [[in the dictionary]PP [TSETSE]PP]. (not other insect)
 e. *I found in the dictionary the [NP [N word] [N math]].
 →f. I found [[in the dictionary]PP [word MATH]PP]. (not Science)

4. 結語

以上のように、本稿では、Guasti & Nespor (1999)で主張された対照強勢の付与による軽い名詞句移動の現象を、Kenesei & Vogel (1993)における焦点付与による音韻句の再構築という現象を援用することによって、さらに正確に分析できることを論証した。

注

- 1 [az angol jatekkal]PP では (19a) (19b) いずれの場合でも同一の音韻句内であるので、側音の口蓋化は、焦点に関係なく適用されている。
- 2 Kameyama (1999) によれば、[it]自身は対照強勢を受けず、その対照強勢形は [THAT]である指摘している。

参考文献

- Akasaka, Y. & K. Tateishi. (2001) "Heaviness in Interface." In J. van. de Weijer & T. Nisahihara. (eds.) *Issues in Japanese Phonology and Morphology*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter. 3-46.
- Culicover, P. W. (1997) *Principle and Parameter: An Introduction to Syntactic Theory*. Oxford: OUP.
- Guasti, M. T. & M. Nespor. (1999) "Is Syntax Phonology-Free." In R. Kager & W. Zonneveld (eds.) *Phrasal Phonology*. Nijmegen: Nijmegen University Press. 73-97.
- Golston, C. (1995) "Syntax Outranks Phonology: Evidence from Ancient Greek." *Phonology* 12, 343-368.
- 畠山雄二. (2006) 『言語学の専門家が教える新しい英文法』東京：ベレ出版。
- Kameyama, M. (1999) "Stressed and Unstressed Pronouns: Complementary Preferences." In P. Bosch & R. van de Sandt (eds.) *Focus*. Cambridge: Cambridge University Press. 306-321.
- Kenesei, I. & I. Vogel. (1993) "Focus and Phonological Structure." MS. University of Szeged & University of Delaware.
- 中村捷・金子義明編 (2002) 『英語の主要構文』、東京：研究社。
- Rochemont, M. S. & P.W. Culicover. (1990) *English Focus Construction and the Theory of Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, J. R. (1986) *Infinite Syntax!* New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- Takano, Y. (1998) "Objects Shift and scrambling," *NLLT*. 16, 817-889.
- Vogel, I (1988) "Prosodic Constituents in Hungarian." In P. M. Bertinetto & M. Loporcaro (eds.) *Certamen Phonologicum*. Torino: Rosenberg & Sellier, 231-250.
- Vogel, I. (1994) "Phonological Interface in Italian." In M. Mazzola (ed.) *Issues and Theory in Romance Linguistics*. Washington: Washington University Press. 109-125.
- Vogel, I. & I. Kenesei. (1987) "Phonology and Other Components of Grammar." *Phonology Yearbook* 4, 243-263.
- Zec, D. & S. Inkelas. (1990) "Prosodically Constrained Syntax." In S. Inkelas & D. Zec (eds.) *The Phonology-Syntax Connection*. Chicago: The University of Chicago Press. 365-378.



Finiteness and the Thematic Structure

Kazukuni Sado

Synopsis

This paper deals with the issue of Thematic structure in non-finite clauses. We shall first confirm that use of non-finite clause is pervasive. Rules and analyses of systemic functional grammar face difficulty when non-finite clauses are analyzed. Through the analysis of corpus including the speeches of the U.S. presidents, we shall see that the marked / unmarked contrast of Thematic structure cannot be applied to non-finite clauses. This is because markedness of the Theme is based on the mood of each clause, which the non-finite one lacks.

0. Introduction

An analysis of the Thematic structure of the clause definitely has been the focus of interest in the systemic functional grammar. Halliday and Mathiessen (2004: 73-78) focus on the marked / unmarked contrast in the Thematic structure. In this article we call this contrast in the markedness in question, particularly in certain kind of clauses. The data is from the speeches of U.S. presidents, as well as from preceding works in the grammar of English.

1. Analyzing Presidents' Speech as Corpus

This study is based on the analysis of U.S presidents' speeches. I have analyzed the first inaugural addresses of the past ten presidents: Barack H. Obama, George W. Bush, William J. Clinton, George H.W. Bush, Ronald W. Reagan, James E. Carter, Jr., Gerald R. Ford, Richard M. Nixon, Lyndon B. Johnson, and John. F. Kennedy.

In this analysis, orthographic sentences marked by full stop are identified as the equivalent of the clause complex. Each clause complex is divided into clauses, both coordinate, subordinate and embedded, to use a

familiar terminology of the grammar of English. All the clause relationships are analyzed. Since the focus of present study is on non-finite dependent clauses, I picked up all of them and analyzed them for thematic and interpersonal structure as well as experiential¹. See the example of analysis below.

(1) By working shoulder to shoulder

Needless to say, this clause is part of the clause complex (1a).

(1a) By working shoulder to shoulder || together we can increase the bounty of all.

(Johns)

The double line “||” indicates the clause boundary. This example is analyzed from the thematic perspective as follows:

| | | | | |
|---------------|--|---------------|--|----------------------|
| (1b) By | | working | | shoulder to shoulder |
| textual Theme | | topical Theme | | Rheme |

Two types of Themes precede the Rheme in this example. Although their functions are slightly different, they together form the thematic part of the clause. (1c) is an interpersonal structure of the example (1).

| | | |
|-----------------|--|----------------------|
| (1c) By working | | shoulder to shoulder |
| Predicator | | Adjunct |

(1c) consists of Predicator and Adjunct. Since this is a non-finite clause, the Finite verb is missing. Another element missing here is the Subject. (1d) is an experiential analysis of the same clause.

| | | |
|-------------------|--|----------------------|
| (1d) By working | | shoulder to shoulder |
| Process: material | | Circumstance |

2. Non-finite Clause

The fundamental characteristic of a non-finite clause is the absence of the Finite verb. Consequently they lack the primary tense in the verbal group. As Biber et al (1999:98) notes, they are regularly dependent. Huddleston and Pullum (2002: 1173-1174) shows that “on the basis of the inflectional form of the verb we distinguish three main kinds of non-finite clauses: infinitival, gerund-participial, and past-participial”. See the examples of non-finite clauses below.

(2) Crossing || he lifted the rolled umbrella high and pointed to show cars, buses, speeding trucks, and cabs Biber et al (1999)

(3) We are the keepers of this legacy, || guided by these principles once more, || we can meet those new threats [[that demand even greater effort, even greater cooperation and understanding between nation]]. (Obama)

(4) No further discussion arising, || the meeting was brought to a close. Quirk et al (1985:1120)

(5) To renew America, || we must be bold. (Clinton)

(2) (3) (4) have participle clauses, while (5) has infinitive clauses. Among the participle clauses, (2) and (4) have gerund-participles² while (3) has a past participle. In (2) (3) (4) (5) non-finite clauses are all dependent on the main clause or to use Halliday and Matthiessen’s (2004:373) term, they are hypotactic.

It is also important to note that absence of the Subject is only a tendency and is not the rule as Biber et al (1999: 198) explain that “they frequently lack an explicit subject”. We shall get back to this issue later, but all we can say at this stage is that Subjects are optional in non-finite clauses.

3. Embedded Clause

3.1. Finite v.s. Non-finite Examples

Although the clausal dependence is the issue in this study, we need to mention here that quite a few non-finite embedded clauses were used in the presidents' speeches.

(6) [[Restoring an attractive retirement program for all active duty members]] is therefore my top legislative priority in the FY 2000 budget.
Halliday and Matthiessen (2004: 438)

(7) Our founding fathers || faced with perils [[that we can scarcely imagine]] || drafted a charter || to assume the rule of law and the rights of man, a charter [[expanded by the blood of generations]]. (Obama)

(8) When our founders boldly declared America's independence to the world and our purpose to the Almighty, || they knew || that America || to endure || would have to change not change for change's sake but change [[to preserve America's ideals—life, liberty, the pursuit of happiness]] (Clinton)

(9) Now, so there will be no misunderstanding ||it is not my intention [[to do away with government]]. (Reagan)

Double bracket "[[]]" indicates the embedding. Let us take our the embedded clauses in these examples.

- (6a) Restoring an attractive retirement program for all active duty members
- (7a) that we can scarcely imagine
- (7b) expanded by the blood of generations
- (8a) to preserve America's ideals—life, liberty, the pursuit of happiness
- (9a) to do away with government

(7a) is a finite relative clause, while (6a) (7b) (8a) and (9a) are non-finite.

Just as dependent ones, they are realized by a participle as in (6a) and (7b) or infinitives as in (8a) and (9a). As I mentioned above, non-finite embedded clauses like these are not within the scope of the present study. For classifications of embedded clauses see Sado (2010).

3.2. Embedded Hypotaxis

Although the embedding may not be our present concern, some embedded clause complexes are analyzed when they have dependent relationship inside.

(10) We will strive to listen in new ways—to the voices of quiet anguish, the voices [[that speak without words]], the voices of the heart—to the injured voices, the anxious voices, the voices [[that have despaired || of being heard]]. (Nixon)

Here the embedded clause complex has a dependent relationship, or hypotaxis, to use Halliday and Matthiessen's (2004: 373) term. The participle clause is dependent on the finite clause which precedes it. Finite or not, these dependent relationships are subject to analysis and part of the statistics in this article.

4. On Pervasiveness of Non-finite Clauses

4.1. Hypotaxis: finite v.s. non-finite

One might ask, however, why non-finite clauses matter. The majority of clauses in use is no doubt the finite ones. Nevertheless, we need to confirm the ratio of non-finite clauses before dismissing them as exceptional form of the clause. Of all the first inaugural addresses of the ten presidents, 494 hypotactic relationships were observed. It is significant to note that 197 of them, or 39.8% were non-finite. Table (1) shows the detail.

Table(1)

| President | Finite hypotaxis | Non-finite hypotaxis | Total |
|---------------|------------------|----------------------|-------|
| Obama | 47 (63.5%) | 27 (36.4%) | 74 |
| G. W. Bush | 32 (62.7%) | 19 (37.2%) | 51 |
| Clinton | 29 (74.3%) | 10 (25.6%) | 39 |
| G. H. W. Bush | 28 (47.4%) | 31 (52.5%) | 59 |
| Regan | 36 (54.5%) | 30 (45.4%) | 66 |
| Carter | 25 (83.3) | 5 (16.6%) | 30 |
| Ford | 14 (66.6%) | 7 (33.3%) | 21 |
| Nixon | 41 (59.4%) | 28 (40.5%) | 69 |
| Johnson | 17 (54.8%) | 14 (45.1%) | 31 |
| Kennedy | 28 (51.8%) | 26 (48.1%) | 54 |
| Total | 297 (60.1%) | 197 (39.8%) | 494 |

No matter what the percentage is, non-finite clauses do exist in the grammar of English, and any linguistic analysis must cover them as well. These figures at least show that the use of non-finite clauses is very common and pervasive.

4.2. Hypotactic Expansion

This pervasiveness is more striking when we limit the scope of comparison to hypotactic expansion. Halliday and Matthiessen (2004: 377) recognize two types of clausal dependence: expansion and projection. Projection is a report or quote realized by verbs of verbal or mental process.

(11) Nick said || there were fifty of you

Bloor and Bloor (2004: 196)

(11) is an example of hypotactic projection, which is traditionally treated as embedding. Expansion is a subordination in the traditional sense. Let us compare (11) with (12) below.

(12) Because our strengths are so great || we can afford to appraise our weakness with candor and to approach them with hope. (Nixon)

The first clause is dependent on the second in this example. Here the dependent clause is finite unlike (2) (3) (4) (5). See the table (2).

Table(2)

| President | Finite expansion | Non-finite expansion | Total |
|---------------|------------------|----------------------|-------|
| Obama | 22 (44.8%) | 27 (55.1%) | 49 |
| G. W. Bush | 21 (52.5%) | 19 (47.5%) | 40 |
| Clinton | 22 (68.7%) | 10 (31.2%) | 32 |
| G. H. W. Bush | 17 (37.7%) | 28 (62.2%) | 45 |
| Reagan | 23 (46%) | 27 (54%) | 50 |
| Carter | 7 (58.3%) | 5 (41.6%) | 12 |
| Ford | 8 (61.5%) | 5 (38.4%) | 13 |
| Nixon | 30 (54.5%) | 25 (45.4%) | 55 |
| Johnson | 13 (48.1%) | 14 (51.8%) | 27 |
| Kennedy | 16 (38%) | 26 (61.9%) | 42 |
| Total | 179 (49%) | 186 (50.9%) | 365 |

Note here that the figure shows the relationships per se but does not necessarily coincide with the number of clauses. A clause projected by another may be dependent on other clause within the clause complex. In the traditional sense of the 'subordinate' clause, 186 out of 365 or 50.9% were non-finite, which is the slight majority. One can safely state that the discussion of hypotaxis is far from complete if we ignore the role of non-finite clauses.

5. General Ideas on Thematic Structure

Clause as a message is divided into two parts: Theme and Rheme. According to Halliday and Mathiessen (2004: 64) "The Theme is the element which serves as the point of the message: it is that which locates

and orients the clause within its context". What element should be the unmarked or typical Theme of the clause depends on the mood of the clause: declarative, interrogative, and imperative. For declarative clauses, the unmarked Theme is the Subject, while imperative clauses have Predicators as unmarked one. In the case of interrogative clauses, yes/no interrogative has Finite verb and the Subject as unmarked Theme, and for wh-interrogative, wh-element is the unmarked Theme.

6. Multiple Themes

We have so far ignored the fact that there are more than one kind of Theme. It is generally understood that Theme represents what the clause is about. However, this definition applies only to certain types of Themes. The kind of Theme that has this function is called a 'topical' Theme. This type of Theme is often preceded by other types of Themes: textual Theme and interpersonal Theme. Examples (13) and (14) have multiple Themes.

(13) Well, | children | the story | is about to continue
 textual interpersonal topical Rheme

Bloor and Bloor (2004: 78)

(14) But | surely | the course | doesn't start till next week
 textual interpersonal topical Rheme

Thompson (2004: 159)

A textual theme relates the clause to its context. See Eggins (2004:305). As Bloor and Bloor (2004: 77) explains, "they are about to continue an idea or refute an argument". They are realized by conjunctions as "But" in (14) or continuatives as "Well" in (13). With interpersonal Themes a speaker or writer "comments on the substance of the following clause" and "display our attitude to something or evaluate a situation" as "surely" in (14). Vocatives such as "children" in (13) fill the thematic position. Finites in interrogative clauses are also interpersonal Themes.

The rule of thematic elements is that the topical theme is obligatory

and textual and interpersonal Theme optionally precede it. In other words, Thematic part of the clause must have a topical one in the final position.

7. Thematic Structure in Non-finite Clauses

7.1. Multiple Themes in Non-finite Clauses

A question now arises: Do non-finite clauses have thematic structure? The answer is, of course, whether it is finite or not, the clause must have a thematic structure. The problem is that the rules, which are based on the analysis of finite clauses, cannot be rigidly applied to non-finite ones. Let us first consider the examples with potential textual Themes and interpersonal Themes. Here are examples taken from presidents' speeches.

(15) While keeping our alliances and friendships around the world strong,
 || we will continue the new closeness with the Soviet Union || consistent
 both with our security and with progress. (G. H. W. Bush)

(16) In serving, || we recognize a simple but powerful truth: ||we need each
 other,|| and we must care for one another. (Clinton)

(17) They need our care, our guidance, and our education || though we
 bless them || for choosing life. (G. H. W. Bush)

(18) Never tiring, || never yielding, || never finishing || we renew that
 purpose today || to make our country more just and generous || to affirm
the dignity of our lives and everyday life. (G. W. Bush)

(19) We will not use our friendship || to impose on their sovereignty, || for
 our own sovereignty is not for sale. (Reagan)

(20) To renew America || we must be bold. (Clinton)

Non-finite clauses in these examples except for the three participle clauses in (18) have textual Themes in addition to the topical ones. They are

realized by a conjunction “while” in (15) and a preposition “in” in (16). Infinitive clauses in (18), (19) and (20) have the preposition “to” as textual Themes. We can find interpersonal themes in (18). One may wonder why prepositions are analyzed as textual Themes. Note that all the underlined parts in (15)-(20) have clausal status. They all have Predicators as participles or infinitives. We can observe that (15) has a conjunction “while” as a textual Theme. The same slot is filled by “In” in (16), “for” in (17), and “to” in infinitive clauses in (18), (19) and (20). Both conjunctions and prepositions relate the clause in its context. Both of them in this case specify logical relationships between the non-finite dependent clauses and finite independent clauses with the same clause complexes. Also, as Sado (2009: 48) notes, the distinction between prepositions and conjunctions in the example (21) below is not important as the word “after” can be analyzed either way.

(21) Ms Richardson and husband James Christiansen and their family restored the house of elegant lines and five bedrooms ||after discovering its hidden beauty behind enclosed verandas and boarded fireplaces.

(Wordbank Online³)

We can find interpersonal Themes in (18). “Never” is an adverb serving as a mood Adjunct of modality. Along with “usually”, “always”, “sometimes”, “occasionally”, “seldom” and “rarely”, it expresses usuality. A MoodAdjunct is a kind of modal Adjunct that realizes an interpersonal Theme. See Halliday and Mathiessen (2004: 79, 125, 128).

We need to remember here that a topical Theme is obligatory in the clause. Where there is textual and / or interpersonal Theme, there must be a topical one. It is natural, therefore, to regard the Predicators as topical Themes because they are the leftmost experiential elements. This might lead us to believe that Predicators are unmarked Themes of non-finite clauses, but we must consider the fact that some of them have Subjects.

7.2. Subjects in Non-finite Clauses

In most cases of non-finite clauses with Subjects, they only have topical themes.

(22) God helping me, || I will not let you down. (Ford)

(23) But neither can two great and powerful groups of nations take comfort from our present course || both sides overburdened by the cost of modern weapons || both rightly alarmed by the steady spread of the deadly atom, ||yet both racing to alter that uncertain balance of terror [[that stays the hand of mankind's final war]]. (Kennedy)

In underlined clauses in (22) and (23) above, Subjects alone fill the Thematic position. We found examples where Subjects are preceded by other kinds of Themes. See example (24) below.

(24) The solutions [[we seek]] must be equitable || with no one group singled out || to pay a higher price. (Reagan)

Let us take out the non-finite clause with Subjects preceded by textual Themes in (23) and (24).

(23a) yet both racing to alter that uncertain balance of terror [[that stays the hand of mankind's final war]]

(24a) with no one group singled out

Both (23a) and (24a) have textual Themes “yet” and “with”, followed by Subjects as topical Themes, “both” and “no one group”. Since Subjects are leftmost experiential elements, we must regard them as topical Themes in these examples.

There are examples of infinitive clauses that seem to have elements that could be analyzed as Subjects.

(25) I ask you to share with me today the majesty of this moment.

(Nixon)

(26) We are a nation under God, and I believe God intended for us to be free.

(Reagan)

One analysis would be that “you” in (25) and “us” in (26) are Subjects of the each infinitive clause. Or they could be analyzed as part of the main clause, “you” as a complement of the Predicator and “for us” as Adjunct. It awaits more research to determine if infinitive clauses have Subjects because the discussion would involve the definition of “Subject”.

We have seen above that Subjects are unmarked Themes in declarative clauses. Table (3) below shows that 19 out of 197 or 9.6% of non-finite dependent clauses have Subjects.⁴

Table(3)

| | | | | | |
|-----------|----------|------------|-----------|---------------|-----------|
| President | Obama | G. W. Bush | Clinton | G. H. W. Bush | Reagan |
| +Subject | 2 (7.4%) | 1 (5.2%) | 0 (0%) | 4 (12.9%) | 4 (13.3%) |
| President | Carter | Ford | Nixon | Johnson | Kennedy |
| +Subject | 0 (0%) | 1 (33.3%) | 3 (10.7%) | 1 (7.1%) | 3 (11.5%) |

From a statistical point of view, Subjects are hardly unmarked Themes, although the statistics may not be the only factor of markedness.

7.3 Mood and the Neutralization of the Markedness

We must remember that the markedness of Themes depend on the mood of the clause. That is what kind of element is the unmarked topical Theme of the clause depends on the mood. The Mood of the clause is realized by Subject and Finite in declaratives, and interrogatives and by

Finite (often merged with Predicate) in imperatives. If the clause has no or incomplete Mood, they are moodless. This leads us to conclude that even though the majority of non-finite have Predicators as topical Themes, neither the Predicate or the Subject is unmarked. The absence of Finite verbs neutralizes the marked / unmarked contrast of topical Themes.

8. Rules and Congruence of the Clause

As I have pointed out in Sado (2008: 57), Halliday and Matthiessen (1999: 49) recognizes phenomena of experience as three orders of complexity: element, figure, and sequence from the bottom to the top. Among three of those levels, “a figure is a representation of experience in the form of a configuration, consisting of a process, participants taking part in this process and associated circumstances”. At the lexicogrammatical level, the congruent realization of the figure is a clause. They further explain that “a sequence is constructed by interdependency relations of expansion and projection”. Therefore the congruent realization of sequence is the clause complex. Elements are congruently realized by groups or phrases. As Sado (2008: 57) notes, this correspondence between human experience and lexicogrammar can be shifted downwards in metaphorical expressions: sequence as clause, figure as group or phrase, and element as word. This happens especially when the verb is nominalized. A point to note here is that congruence and metaphor are relative and that there is a degree or scale of congruence even when the figure is realized as a clause.

(27) The American dream endures. (Carter)

Here the figure is realized as a finite independent clause, the most congruent realization.

(28) Because we are free || we can never be indifferent to the fate of freedom elsewhere. (Carter)

The figure is realized as finite dependent clause. This is also congruent but in the scale of congruence, it is more metaphorical than (27).

(29) We must show courage in time of bleeding ||by confronting problem ||
instead of passing them. (G. W. Bush)

Although these two non-finite clauses retain the clausal status, they are much more metaphorical than (28).

(30) Let us never negotiate out of fear. (Kennedy)

The prepositional phrase “out of fear” is a part of a clause. Although it has a nominalized process “fear” it does not have a clausal status but is downgraded to a phrase. This is the case of the most metaphorical and least congruent realization of the figure.

As we have seen so far, there are various kinds of non-finite clauses. Some are more congruent than others. The Theme–Rheme structure and its rules are weakened or do not apply at all as the clause becomes more metaphorical. This is probably because methods of analysis and rules are based on the most congruent form, that is, the finite clause. The fact we have discovered as a result of research is that marked / unmarked contrast does not apply to non-finite clauses.

9. Conclusion

Research in various kinds of clauses can sometimes discover the difficulty or limit of application of the rules and analyses. The issue of markedness was the case in non-finite clauses. This does not necessarily lead us to invalidate markedness in the grammar of English in general. We can say that no rules or method of analysis are perfect since they have to deal with infinite number of uses. Further research may reveal other problems.

Notes

- 1 An experiential meaning is a subcategory of the ideational meaning along with logical meaning in systemic functional grammar. I prefer the term 'experiential' here because they are meaning inside the clause rather than logical meaning which express interclausal relationship.
- 2 This is a term in Hoddleston and Pullum (2002: 80), a term that covers both traditional gerund and 'present' participle. They believe it untenable to make the distinction.
- 3 This example is from Wordbank Onlie through Shogakukan Corpus Network. I would like to express my gratitude to the Collins and Shogakukan for providing examples through the Internet.
- 4 These figures include infinitive clauses. If we do not allow them to have Subjects, G. H. W. Bush would have 1 Subject, Reagan 3, and Nixon 1. The total would be 13 or 16%.

References

- Biber, D., Johanson, S., Leech, G., Finegan, E. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- Bloor, T and Bloor, M. (2004) *The Functional Analysis of English*. Second Edition Arnold.
- Eggins, S. (2004) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*. Second Edition Continuum.
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (1999) *Construing Experience Through Meaning*. Continuum.
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen C. M. I. M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. Third Edition. Arnold.
- Huddleston, H and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Otani, T. (1993) *America Daitoryo no Eigo Kennedy / Johnson*. ALC.
- Otani, T. (1993) *America Daitoryo no Eigo Nixon / Ford*. ALC.
- Otani, T. (1994) *America Daitoryo no Eigo Carter / Regan*. ALC.
- Otani, T. (1994) *America Daitoryo no Eigo Bush / Clinton*. ALC.
- Quirk, R., Greebaum, S., Leech, G., Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of English*. Longman.
- Sado, K. (2008) On the role of 'Gerunds' in clause combinations. The Council of College English Teachers Research Reports. No. 27.
- Sado, K. (2009) Grammatical Metaphor as a Relative Scale of Nominalization. Konan Eibungaku. No. 24.
- Sado, K. (2010) On the Degree of Grammatical Metaphor in Embedded Clauses the Memoires of Niihama National College of Technology. Vo. 46.
- Sakamoto, Y. (2009) *Obama Daitoryo Enzetsu*. Cosmopier.



甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を図ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
 2. 機関誌『甲南英文学』の発行
 3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。
1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
 2. 名誉会員 本会の発展に著しく貢献した者
 3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、大会準備委員長1名、編集委員長1名、幹事2名。
2. 役員の任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
 3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
 5. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
 8. 評議員は、会員の意思を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
12. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
13. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間3,000円、学生会員については1,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会 第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会 第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学から若干名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。

この規約は、平成11年6月26日に改訂。

この規約は、平成13年6月23日に改訂。

この規約は、平成17年7月3日に改訂。

この規約は、平成21年6月27日に改訂。

この規約は、平成22年7月3日に改訂。

この規約は、平成23年4月1日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は 1 部プリントアウトして郵送するとともに、Word ファイル形式 (.doc)、あるいはリッチテキスト形式 (.rtf) の電子データを任意の方法で編集委員長宛に提出する。和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスは 65 ストローク×15 行 (ダブルスペース) 以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
 - イ. 和文: ワードプロセッサ (40 字×20 行) で A4 判 15 枚程度
 - ロ. 英文: ワードプロセッサ (65 ストローク×25 行、ダブルスペース) で A4 判 20 枚程度
4. 書式上の注意
 - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
 - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
 - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 7th ed. (New York: MLA, 2009) (『MLA 英語論文の手引き』第 6 版, 北星堂, 2005 年) に、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet* (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は 11 月 30 日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を1200字（英文の場合は500語）程度にまとめて、プリントアウトしたもの1部を電子データとともに大会準備委員長宛に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割り振りは、大会準備委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、原則として一人30分以内（質疑応答は10分）とする。

ISSN 1883-9924

甲 南 英 文 学

No. 26

平成23年6月20日 印刷

—非 売 品—

平成23年7月2日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付
